



理系彼氏の叱り方

飯山和弘が本社に異動となったその日。

職場での歓迎会は日を改めて行われることになっていたが、安西が本社にいる同期に声をかけて飯山の本社異動歓迎会を計画してくれていた。本社の各部署にいる同期と改めて挨拶を交わせる機会は飯山にとってはありがたく、週半ばの水曜日ではあったが二次会三次会まで飯山は笑顔で主役を務めた。

その帰り。

もう電車もない時刻で、飯山はタクシーを使って帰宅した。ほろ酔い加減で気分よく、通りでタクシーを降りてアパートまでほんの少しの距離を歩く。

ぼおっとしていた。

最後の数メートルはカバンに入っているはずの鍵がなかなか見つからず、下を向いて歩いていた。だから深夜の静寂を破り、

「おかえりなさい」

いきなり前方からそう声をかけられて、飯山は飛び上がるほど驚いた。

杉だった。香港にいるはずの杉義彦がドアの前に立っていた。

「え、え、なんで……！？ ウソだろ、なんで、おまえ、香港じゃ……」

もしかしたら飲み過ぎで幻影でも見てるんじゃないのか、いや、アパートに帰ってきたというのも夢で、本当は自分はまだタクシーの中で寝こけているんじゃないか——目の前に立つ杉の姿が意外すぎて、ついラチもないことを考える。

「……………」

そんな飯山をじっと見る杉の視線の剣呑さに気づけたのは、最初の驚きがようやく落ち着いてからだった。

「あ、いや……びっくりしたよ！ どうしたんだよ、帰って来るなんて一言も……」

「仕事ですか」

いきなり詰問口調で問われる。

「こんな時間まで仕事ですか」

「いや、今日は飲み会で……酒臭くないか、俺？」

だらしなくゆるめたネクタイ、肘にかけた上着という格好が急に恥ずかしくなる。見れば杉のほうこそ仕事帰りのようにきちんとスーツを着込んでいる。

飯山は乱れていた襟元をさりげなく整えながら、ドアへと近づいた。

「ま、とにかく入れよ。待ってくれてたのか、悪かったな」

玄関を入ると、小ぶりの旅行カバンを持って杉が続く。その目つきがどうにも不穏だったが、

リビングに入るなり、

「脱いでください」

と高圧的に言われたのには眉が寄った。

「――なんだよ、いきなり」

「今、胸元を隠しましたよね」

「はあ？」

「飲み会って、誰と呑んでたんですか。その相手の痕がついているんですか」

「ちょ、ちょっと待て、杉……」

「脱いでください」

もう訳がわからなかった。杉は猜疑心のかたまりになっていた。

そう――こまめに連絡を取り合っていたのは、本当だ。

昨日、ネット電話で長話したというのも、本当だ。

が。

「わ、わかった。見せればいいんだろ、見せれば」

ネクタイを抜き取り、シャツのボタンを外し、飯山は前を広げた。ランニングも少し押し下げる。

「ほら。キスマークもなにもないだろ」

とりあえず杉の疑いを晴らしてやらなければ話が前に進まない。飯山は素直に要求に従ったが

、

「全部」

突然現れた恋人は頑なだった。

「全部脱いでください」

飯山は大きくひとつ溜息をついた。

「……どうしたんだ、杉。俺は浮気なんてしてないぞ。疑ってるのか」

「はい」

はい。即答だった。

酔いが急速に醒めていく。厄介な状況になっていることを飯山は認めた。

「――わかった。じゃあ全部脱いでやる。けど、その前に少し座らないか」

まず落ち着いて話をしようと、自分からカウチにかける。だが、杉は突っ立ったままだった。

「……あなたは口がうまい」

ぼそりと言われる。丸め込まれるとでも言いたいのかと、さすがにむっとくる。

「だからあとでちゃんと脱いでやるって言ってるだろ！」

「携帯を見せてください」

「は？」

「浮気をしていないと言うなら、携帯電話を見せてください」

なんでそこまで、とは思った。が、やましいことがないのにこんな深夜に押し問答するのも面倒で、飯山は尻ポケットに突っ込んであった携帯を乱暴に引っ張り出すと杉に突きつけるように差し出した。

「失礼します」

そんなところは律儀に断りを入れて、杉が携帯電話を開く。飯山にしたら、ヘンな履歴などない、怪しいところがあるなら見つけてみる、ぐらいの気持ちだった。だが、杉の顔はみるみるうちに強張った。

「……メールも……通信も……安西、安西、安西……」

「あ！」

うっかりしていたとしか言いようがない。本社営業への異動と同時に安西の仕事を引き継ぐことに決まってから、安西とはなにくれとなく連絡を取り合っていた。よりもよって、安西――以前にも杉が飯山との仲を疑って嫉妬した相手だった。身に覚えがないからこそあっさり携帯を差し出したが、杉にしてみれば開き直っているようにしか見えないだろう。

「杉、それは……」

「おかしいと思ってました。この一ヶ月ほど、あなたはいつも帰りが遅かった。メールしてもいつもより返信が遅いし、電話で話していてもあまり楽しそうじゃなかった」

「だから、それは……」

「今夜も安西さんと一緒だったんですか」

「……あ、安西だけじゃなくて、ほかのヤツも……」

一緒、とまでは言えなかった。舌を噛みそうな勢いで、杉にカウチの上に押し倒されていたからだ。

こまめに連絡を取り合っていた。昨日もネット電話で話した。

それは本当だ。

が、確かに、異動前のこの一ヶ月、飯山は忙しかった。今までの仕事を後任に引き継がなければならなかったし、夜ともなれば、今までのつきあいから「送別会」に引っ張り出された。新宿支社内の身内ばかりではない、営業としては誇りにしていいだろうが、客先から異動を惜しんで飲み会に誘われることも多かった。

なにしろ杉を驚かせたくて隠していた本社への異動だ。多忙の理由を話すわけにもいかない。今まで通りを装っていたが、確かに杉とのコミュニケーションがおろそかになっていたかもしれない。

「……くやしい」

飯山の両肩を上から押さえつけ、杉が呻くように呟く。逆光になっていても、眼鏡の奥のその目が炯炯と光っているのがわかる。

――まずい、キレてる、こいつ。

飯山はごくりと唾を飲んだ。

「あなたを信じて、三年、我慢しなきゃいけないと……なのに」

だから俺はおまえを裏切ったりしていない、そう言いかけたところで覆いかぶさってきた杉に唇を塞がれた。

いきなり舌を捻じ込まれる。

体重を使って飯山の動きを封じ、嫉妬に駆られた男は乱暴なキスをした。ぶつかった歯がガチガチ鳴り、舌も、唇も、噛みつかれて血の味が広がった。

「ちょ、ちょお待てっ！」

渾身の力で狂った犬のような男の頭を押し返す。

「血、血出たろ、バカっ！」

怒鳴る。

だが、杉は飯山の怒声にも動じなかった。自分の頭を押し返した飯山の両手を掴むと、ひとつにまとめて飯山の頭上で押さえつけた。

「安西さんとは何回？」

「何回もクソもあるか！ あいつとは仕事の……」

「この一ヶ月ですよね」

「だから、それは……！」

「くやしい。ぼくは数ヶ月に一度しかあなたに会えないのに」

「杉！ 人の話を聞け！ ……ンぐ…ッ」

また強引に唇を重ねられる。不実をなじり、罰するような、きついキス。

日本と香港の海をまたぐ遠距離恋愛、一ヶ月にわたる恋人の不穏な動向、熱が醒めたのだとしか思えないようなレスポンス、不安を抱えて様子を見に来てみればタクシーを使っただけの深夜の帰宅、見せてもらった携帯電話には怪しいと疑ったことのある相手の名前。

杉の立場に立って考えて、まずかったと思ってもいまさらだった。

「あなたを誰にも渡したくない……！」

そんな宣言、されなくても。この、ちょっと変わった思考回路を持つ、困った男だけが飯山の好きな相手なのだ。

ガチャガチャとベルトを外す音がした。乱暴な手がスラックスのファスナーが壊れかねない勢いで、スラックスと下着を押し下げようとする。

さすがに血の気が引く。

「す、杉っ！ し、したいならさせるから……なにもこんな、乱暴……」

強制的に下半身を剥き出しにされる。殴られてこそいないものの手の自由を奪われての暴力的なやりやうに、飯山はさすがに抵抗した。このままではレイプと変わらない。

軀をよじり、肩で杉を押しやり、脚で杉を蹴ろうとした。

その抵抗が気に入らなかったのか、杉が大きく動いた。

「あっ、うわっ！！」

スラックスと下着を一気に脚から抜き取られた。ふくらはぎをきつく掴まれ、大股開いたV字開脚の形にさせられる。膝が胸につくほど深く軀を曲げられ、息苦しさや痛みで飯山は呻いた。

男に無理矢理軀を奪われる女の憤りと口惜しさと、そして恐怖が、その瞬間の飯山には理解できた。

――が。

飯山は飯山で、杉は杉だった。

奇妙な間があった。

そこまで暴力的にコトを進めてきた杉が、ふとその動きを止めたのだ。

下半身すっぽんぽんで深くV字開脚している飯山の秘所は無防備に曝け出され、さらなる狼藉に対してまったく無力なように見えた。

もし、杉もまた下半身すっぽんぽんの状態だったら、飯山はそのまま合意なしに杉に貫かれていただろう。

が……嫉妬の勢いだけでコトを進めてきた杉はまだ自身のベルトすら外しておらず、両手で飯山の両脚を押さえつけている杉にはファスナーを下ろす手はなかった。

杉は瞬間どうしようかと迷い、そして片手で両脚を拘束しようとしたらしい、大きく広げられていた脚が正面で閉じられ、そして左手がゆるんだ。

チャンスだった。

飯山は遠慮のない蹴りを正面の男目掛けて放った。

不自然な体勢での蹴りはクリーンヒットとはならなかったが、杉は大きく上体を揺らがせる。その隙に飯山は急いで軀を起こした。

「この……！」

飯山の反撃を封じようと、杉は反射的にだろ、手を振り上げた。

だが、そこでもまた、奇妙な間があった。

――この男は俺を殴れない。

一瞬の確信だった。

この男は俺を殴れない、だが、俺は殴れる。

飯山は固めた拳で杉の頬を思い切り打ったのだった。

「正座！」

眼鏡が飛び、レンズが割れた。

殴られた衝撃とその音でようやく正気づいたように見える男に飯山はすかさず命じた。

社会人になってからは縁のなかった喧嘩だが、それなりに元気な少年時代には取っ組み合いの経験ぐらいはあった。喧嘩は気迫だ。いったん優勢となったらそのまま押さねばならない。

「そこに座れ！」

びしっと床の上を指差す。

頬を赤くした杉が黙って膝を揃えて座る。

ワイシャツの裾でなんとか股間を隠し、飯山はその前に立った。

「おまえ、今、なにをしようとした」

「……………」

「言え！ なにをやるつもりだった！」

「……あなたを……」

「俺を？」

問い詰める。

「……抱こうと」

「抱く！？ 嘘つけ！ おまえ、無理矢理やろうとしてたろ！」

決め付けられて反論の余地もなく、杉がうなだれる。

「……ごめんなさい」

謝ってすむなら警察はいらない。そんな常套句が出そうになるのを飯山は飲み込んだ。拳を受けた杉の頬は痛々しく腫れあがりだしている。会うのは八月のお盆休みに合わせて飯山が香港に遊びに行っていて以来、約二ヶ月ぶりだ。確かに一瞬、怖い思いをさせられたが、このまま怒り続けたいわけではなかった。

「――おまえ、俺が浮気してると思ったのか」

少し声をやわらげて尋ねる。

杉が無言でうなずく。

「バカだな。何度も言ってるだろ。俺にはおまえだけだって」

「……でも、あなたはこの一ヶ月、おかしかった。前の決算の時期だってこんなふうじゃなかった。メールの返事は遅いし、ぼくの話をちゃんと聞いてくれてるようには見えなかった」

「それは……悪かったよ。ちょっと……」

人事異動が決まったことを杉には伏せていた。職場に電話が掛かってきたら驚くだろうと、それが楽しみだったからだ。しかし、こんなふうに杉が日本に帰ってきてしまったなら黙っていてもしょうがない。

「……人事異動が決まったんだよ。今日付けで俺は新宿支社から本社の営業に移ったんだ。アジア担当だ。前から安西にも誘われていて……おまえのフォローができると思ったから……」

目尻の切れ上がった、シャープな印象のある杉の目が見開かれた。

「飯山さんが本社に……」

「安西の後任だ。この一ヶ月は俺自身の仕事の引継ぎでバタバタして……今日は異動初日に安西が同期で歓迎会を計画してくれて、遅くなった」

「……知りませんでした……」

呆然と呟く杉の前に飯山は膝をついた。肩に手を置く。

「……悪かったよ、知らせなくて。……その……驚かせてやりたかったんだ」

飯山からの情報を整理しようとしているのか、杉がぱちぱちとまばたきする。その視線がやがて飯山の顔に固定された。

「『恋人というのは通常の友人関係や会社での人間関係よりはるかに親密度の高いものだ』」

杉がなにを言い出したのか、最初、わからなかった。

「『そういった相手には、どうしたんだろうと相手が不安になるようなことは極力避けてやるのが恋人同士のマナーだ』」

それはかつて、平気で連絡を断ってしまう杉に飯山が言って聞かせたことだった。急激に居心地が悪くなり、飯山はもそりと腰を動かした。

「――あなたが教えてくれたことです」

「……その……悪かったよ。仕事でも関係ができると思ったら、おまえ、喜ぶかなと思って……驚かせたくて、黙ってた」

すまん、と頭を下げると、杉は『いいえ』と首を振った。

「責めたいんじゃないです。ただ……そういうことをマナーとして知っているあなたがぼくになにか隠している、正直に話してくれない、だったら、それは……ぼくに知らせたくないことにちがいない。裏切り……それしか浮かびませんでした」

「それで……確かめたくて日本に戻ってきたのか」

杉がこくりとうなずく。

飯山は唇を噛んだ。先刻、杉に噛まれたところがぴりりと痛む。いくら不安だったと言っても、あんなキスをしたり、無理矢理やろうとしたり……ここはびしっと言って聞かせるべきところだ。頭ではそう思う。思うのだが……。

「……悪かった。不安にさせて」

厄介な男の頭を胸に抱え寄せて飯山は囁いた。

俺は杉を甘やかし過ぎているのかもしれないと自覚しながら。

今度は優しく、お互いに唇を寄せ合ってキスを交わした。

「……鉄錆の味がする……」

「おまえが噛んだからだろ」

「ごめんなさい。安西さんとあなたが、と思ったら……」

「安西にもたいがい失礼だぞ。あいつ、ちゃんと可愛い彼女がいるのに」

「……ごめんなさい……」

「もういいよ、黙ってた俺も悪かった」

口中に差し入れられてきた舌は、今度はいたわるようにゆっくりと飯山の舌の上をすべる。

本来の杉の、優しいけれど、いやらしいキス。

舌を絡め合い、欲しがるとともに好きに口腔をねぶらせていると、なんだか口の中の粘膜がほどけて柔らかく蕩けていくような気がした。その蕩けたものを杉に与えたくて、自分からも舌を差し入れる。男は唾液ごと飯山の舌を吸い上げた。

「……ん……」

杉の硬い毛のあいだに指を忍ばせる。

思わぬ展開に驚いていた飯山の軀も、馴染んだ腕に抱え込まれてゆっくりと弛緩していく。

「和弘……もう、ここで？」

ベッドに行かなくてもいいかと尋ねられ、飯山は答えの代わりに濡れた唇を杉のそれに再び押し付け、杉の頭を引き寄せながら、自らラグの上に倒れこんだ。

「和弘」

最近、深い行為に及ぶ時、年下の男は飯山の名前を呼び捨てるようになった。少しだけ傲慢で、少しだけ自分の所有権を主張するような、呼び捨て。そうして呼ばれるたび、『えらそうに』と思うと同時に、この男にそこまで拓かれ征服された実感が湧いて、飯山は腰の下あたりが不思議に疼くのを覚える。

首筋に杉が鼻先を擦り付けるように顔を埋める。今日はシャワーも浴びてないことに気づいて羞恥が込み上げたが、それさえもいまさらだった。

もうすでに裸に剥かれていた下腹に杉の手が触れる。この二ヶ月、自分の手しか触れるものがなかったソコを握り締められ、飯山は思わず声を漏らした。

「――この手触り、やっぱり好きです」

嬉しそうに囁かれ、柔らかく耳朶を噛まれる。飯山の好きな強さに握られたまま上下に擦られれば、すぐに分身は芯を持って立ち上がった。

男の指は熱を持って膨らんだエラのあたりを形を確かめるように撫でまわす。

「ん、ん……杉……あ……」

与えられる快感に素直に声を放つ。愛撫の手は淫らがましさを増し、耳朶で遊んでいた唇はさらなる快感を与えようというのか、飯山の乳首を挟んだ。

「あッ……」

上げた声が吐息に溶ける。それを喜ぶように杉はべろりと胸の尖りを舐めた。

「ん、あ……！」

今まで飯山がつきあった女性たちの中で、男の胸を愛撫したがる者はいなかった。しかし、杉にかわいがられるようになって、自分でも単なる飾り程度にしか思っていなかった乳首に性感帯があることに飯山は初めて気づいた。

今では、舐められるのも、かじられるのも、吸われるのも、指で弄られるのも――好きだ。

心得ている杉は空いた手で濡れた乳首をつまんでくる。

「ッ！」

鋭く走った官能に、握られたままのペニスが先走りの露をこぼした。

それはそのまま飯山を握る杉の手を濡らし、強弱つけてしごく動きにつれてにちゃにちゃといやらしい音が立つ。すると、もっと零せとばかりに指で先端の割れ目をくじられた。

「――っ、アア……！」

腰が勝手に跳ね上がる。

軀の奥に小さくともった火が荒々しく狂い立ち、飯山は激しく乱れるだろうこれからの行為に小さく身震いした。

荒い息を互いの口の中にこぼしながら唇を寄せる。

どれほど吸いあっても足りない。

だから、噛む。

舌を噛まれ、唇を噛む。

新たな血の味が広がる。

男はやはり、獣に近いのだろうか。血の香りに、煽られていた。

下半身から絶え間なくグチグチと湿った音が聞こえてくる。もう、飯山の手も杉が零した透明な露にしとどに濡れていた。

互いに求め合う手に互いの服はとうに取り去られ、全裸で唾液滴る口づけを交わし、互いの性器をしごき合う。

遠距離恋愛になって、セックスが濃くしつこいものになったように飯山には感じられる。会えなかった時間を、二人を隔てている距離を、一気に埋めてお互いを確かめ合う。どれほど肌をこすりあっても、どれほど唇と舌を使いあっても、もっともっとと乾く心がある。

今日はそれに、杉の嫉妬による暴走の余波が絡み、狂おしさはいやましに増していた。

イキたい。

イキたくない。

挿れたい。

挿れたくない。

焦らしたくて、焦らされたい。

無残に上りつめて散りたくもあり、いつまでも炙られてもいたかった。

ついに杉の指がヒクつく後孔を探り当てたとき、飯山は深い吐息を漏らした。

「――もう？」

問いかけに飯山は小さくうなづく。

いやらしい湿りに濡れていた指はやすやすと飯山の内へと沈められてきた。

「ああ――」

それは己の耳にさえ、満足げに響く声だった。

ぬぶ……。

二本目。

己を拡げる指に、飯山は背を反らす。

「ん、ア、ああ、ああ、んーッ」

激しく指を出し入れされて、荒々しい波に軀の内を満たされる。快感に溺れたいのか、逃げたいのか、わからぬままに飯山は軀をのたうたせる。

「和弘……」

それなのに、少し苦しげな呟きとともに虚ろを満たしていた指を引き抜かれた。

「あ！」

思わず飯山は声を上げていた。

「な、そんな……」

ひどいじゃないか。

抗議の声はやはり深いキスに溶ける。

キスのさなか、くるりと軀を半回転させられ、飯山は杉の上に乗る形になっていた。

「ぼくも、もう……。今日はあなたが上に。お詫びです。好きに動いて……」

さきほどの乱暴のお詫びだという。

——そんな勝手な理屈があるか、なにがお詫びだ。

頭の片隅でそんなことを思ったが、軀はもうさらなる快感を追うことしかできなかった。

天を向く杉の屹立に手を添えて、飯山はゆっくりとそれを身の内に呑み込むために腰を落とした。

己を責めるように。

いやらしい肉の襞をいじめるように。

何度も何度も浮かせた腰を深みに落とす。

「う、あ……はう……んー、ンッ……んあ——っ……！」

絶え間なく、淫らな声を放ち、腰を揺らめかせる。

「和弘……いいです、すごく……」

横たわる男の眉間に、なにに耐えるのか、深く縦皺が刻まれているのを見ながら、飯山は大きく、自身を抉らせるために腰を回す。

「——ん！」

下の男が顔を歪める。

——バカな男。

自分がこんなふうに乱れるのはこの男に対してだけなのに。

欲しいのはこの男だけなのに。

「……ばーか」

荒い息と乱れた喘ぎの合間に、そう罵ってやる。

「おまえ……俺のこんなカッコ……ア……ほかの誰が、知ってる、って……言うんだ」

後ろに男の剛直を呑み、それでもいやらしく前を勃て、男の胸に手をつけて、腰を振る。時に快感に喉を反らし、よがり声を放ちながら。

「バーカ……おまえだけ、なんだよ。……おまえ、だか、ら……ッ」

ぶるりと躯が震える。もう、限界に近い。快感がきつすぎて、なぜだか目が潤む。

「おまえが、好き、なんだよ…！ バカ、バカ、ばー、か……あ！」

くるりと躯を入れ替えられた。

バカバカといいだけけなした相手に雄の顔で見下ろされ、新しいざわめきが胸を走る。

「ぼくも、です」

ゆっくりと飯山の太股を抱え上げながら杉が囁く。

「ぼくも、あなただけが、好きです」

杉。

飯山は手を伸ばした。大好きな男の首を引き寄せる。

直後、激しく――今までの飯山の動きなど稚戯に等しかったのだと思わせるような激しさと強さで――男の楔を引き抜いては打ち付けられ、眼裏が眩しいほどの白さに灼けるのを覚えながら、飯山はだくだくと快の証を己の腹の上に撒き散らしていた。

* * * * *

休みたい日に限って休めないというのは、なにかの法則だろうか。

寝不足と激しい運動と消耗による全身の倦怠感、加えて腰の痛みに、飯山は溜息をついた。つらい。

出社したくない。

これが今までの古巣の新宿支社だったら、急な発熱とでも腹痛とでも理由をつけて休んでいる。

異動二日目、実質出勤一日目の新しい職場に、いきなり欠勤するわけにはいかない。

事情を知った杉はひたすら「ごめんなさい」を繰り返し、朝食の支度も飯山の出社の支度もかいがいしくやってくれたが、一日休める杉に恨みがましい視線を向けずにいられるほど飯山もできた人間ではなかった。

冷水で少しむくんだような顔を何度も洗い、とっておきの千円のドリンク剤を飲んで、飯山はなんとか出社した。

「よう。ゆうべはお疲れ！」

一緒に三次会まで過ごした安西の笑顔が眩しい。

「おはよ……ゆうべはありがとな。みんなと会えてよかったよ」

安西が幹事を務めてくれた昨夜の歓迎会の礼を言う。ほんの昨夜の出来事なのに、その歓迎会がひどく遠い昔の出来事のような気がした。

「……なんだ、おまえ。えらく疲れた顔してないか」

「あー……少し緊張してるかな。新しい職場だし」

笑顔を作って見せる。安西はすぐに『そうか』と納得してくれたようだった。

「今日はいろいろ挨拶回りするけどな。まず香港と上海に電話で挨拶いれようかと思うんだ」

あ、と思ったが、飯山になにを言えるわけもなかった。

まず安西が電話をかけ、それから飯山に替わるという手順を何度か繰り返した。

その、何度目か。

「え、あ、そうですか。今日だけ？ え？ 今週いっぱい？ なにかあったんですか？ ああ、年休がたまって……ああ、そうですか。いえ、また掛け直します。はい、どうもー」

電話を切った安西は残念そうな顔で飯山を振り返った。

「設計の杉だけど。昨日の昼から今週いっぱい、年休とって休みだって。せっかく仲のいいおまえが担当になったのにな。知ったら喜ぶだろうに」

「――あ、ああ、そうか……うん、残念だな。来週には戻るんだろ？」

「今まで休みなんかとったことないヤツなんだよ。でも年休の消化率が悪すぎるって人事から連絡があったらしい」

それは杉からも今朝聞いたことだった。

飯山の様子がおかしいと悩んでいた杉は、人事から年休消化促進の連絡があったのを幸い、半日使って仕事の段取りをつけ、日本に帰ってきたのだという。

安西には初めて聞いたような顔で無難な相槌を打った。

「月曜には出てくるらしいけど……五連休か。どっか旅行でも行ってんのかな。おまえ、聞いてる？」

「さ、さあ」

その男は左頬に保冷剤を貼って腫れを冷やししながら、たぶん、今頃ウチで掃除機でもかけてます。

まさかそんなふうにするわけにもいかない。

「まあ挨拶は月曜だな。おまえが担当だって知ったら驚くぞお」

ばん、と安西に背中を叩かれ、いやもう話しちゃったしと心で返して、飯山は作り笑いを浮かべたのだった。

end

2010. 6. 3 HP公開

br/ 男の指は熱を持って膨らんだエラのあたりを形を確かめるように撫でまわす。

文系彼氏の愛し方

『ん、あ、おはよう』

『こっちはいい天気だ。そっちは？』

『はは。今日も一日がんばれよ』

杉義彦の一日はこの「飯田和弘・モーニングバージョン」から始まる。本当は「おはよう」のバージョンがもう何種類か欲しいところだが、午前中にスカイプで連絡を取り合う機会は少なく、なかなか増やせない。

今日は仕事で新しい縫製工場を訪れる。杉は携帯電話の音声ファイルの中から「人づき合い・出会い編」を選び出す。

『挨拶は基本だぞ。大きな声ではっきりと。相手の目を見て。でも、がちがちに緊張しちゃってると相手は喧嘩売られてんのかと思っちゃうからな。ちょっと笑みを浮かべるぐらいの気持ちでソフトにな』

次に「人づき合い・基本編」を開く。

『相手の話をよく聞け。ただし、相槌はこまめに打て。ええ、とか、はい、とかでいいから。反論したいときにはまず、それはちょっと……とだけ言う。自分が正しいからっていきなり熱弁をふるったり、一言で相手の要求を蹴るんじゃないぞ？』

「はい、わかりました」

携帯に向かって律儀に頭を下げる。

工業マシンメーカーの設計者である杉義彦は三年前、営業の飯山和弘に出会い、着るものから人づき合いのハウツーまで細かく指導してもらううちに恋人になった。頼りがいがある、しかも抱けばいい声で啼いてくれる飯山は杉にとって最高の恋人だった。それなのに、二年前、杉に香港駐在の話が持ち上がってしまい、飯山と離れたくない杉と男として仕事の大切さを説く飯山は、あわや別れるかというところまでこじれてしまった。結局、杉は飯山の説得を受け入れ、こうして香港と東京での遠距離恋愛という形に落ち着いたのだが、飯山の存在がなければ自分はここまでこれなかったという思いの強い杉にとっては寂しいことこの上ない状況だった。

半年と少し前から飯山はそれまでの新宿支社から本社営業に移り、杉のいる香港事務所担当となってくれていて会社でも頻繁に連絡を取ることができるようになったが、それでも杉にしたら「飯山が足りない」のだった。

こんな状況なのだから、頻繁なスカイプでの通話を利用して自分が「飯山ファイル」を作ったのは自然な流れだと杉は思っている。

最初は、パソコンを使って行うスカイプでの通話なら簡単にデータをパソコン内に残せるのではと気づいたところからだった。IPレコーダーなどを用意して会話を録音するなら相手の同意があるし、それは盗撮の類と同じ卑怯なマネのような気がする。しかしパソコンには初めからさまざまなデータを取り込める機能があるのだ。そんなことはわざわざ確認するまでもない、常識だ。スカイプを使うというからにはパソコンを通すのは自明の理、つまり、通話がまるっとデータとして残されるというのも自明の理――。

それが自分の勝手な理屈だとは杉は気づかなかった。杉の中ではわざわざIPレコーダーを用意することとパソコンの機能を活用することは、まったく別のことだからだ。

杉は「飯山ファイル」を作った。

さまざまなバージョンに分けて、使用頻度の高いものは携帯電話にも落とした。朝の目覚ましに使う「モーニングバージョン」、新規の顧客に対する時の心構えを説く「人づき合い・出会い編」および「基本編」。ほかにもトラブルが起こったときに謝罪のコツを説いた「トラブル解消・謝罪編」とか「トラブル解消・フォロー編」など、用途に応じて各種用意した。

ビジネス編の「材料」は簡単に手に入る。スカイプでの会話の中で、飯山に「すみません、こんな時はどうすれば……」と話を振れば飯山はすぐに親切に、「そういう時はさ……」とアドバイスをくれるからだ。

難しいのは「夜のお愉しみ編」だった。飯山は杉に言わせれば「ストイック」だったからだ。

同じ男なのだからもう少し、恋人と離れ離れになって寂しい男の気持ちややり場のない欲望の発散について理解があってもいいのではないかと思うのだが、飯山はなかなか杉のリクエストに応じてくれない。海を隔てて別れて暮らしている。あたたかい肌を重ねて共に快楽に沈むことができないなら、せめて、触れることのできない軀を見つめたい、愛しい人のいやらしい姿を見たい——そう願うのはそれほど異常な性欲というわけではないと思うのだが、飯山はPCのカメラの前に恥ずかしいところを晒して欲しいという杉の願いを頑として聞き入れない。音声だけのエッチ、いわゆるテレホンセックスにはなんとか応じてくれるが、それだって毎回というわけではないし、飯山は喘ぎ声さえ我慢しようとするから、可愛いおねだりの言葉などはめったに聞けなかった。*1参照

出来ることなら「夜のお愉しみ編」に「淫乱おねだり集」「焦らされて泣いちゃった集」「イキまくり集」などなどのラインナップを取り揃えたいのだが、あまり過激なリクエストをすると飯山は通話を切ってしまう。

帰国して、ベッドの中で杉は聞いてみたことがある。

「どうしてこんな恥ずかしいことまでさせてくれるのに、ネット通話の時はあんなにつれないんですか」と。

その夜は久々の再会にさんざん抱き合っ、それでも「まだあなたを感じていたい」という杉のわがままで、繋がりは解かないままに杉は飯山を背後から抱き締め、前に回した手で飯山のモノをふにゃふにゃと弄び続けていたのだった。

「え……」

杉の腕の中で飯山は気だるそうに身じろいだ。

「……そんな……ちがうだろ、全然……」

「あなたはよく恥ずかしいからダメだと言いますよね。なら、今は……これは恥ずかしくないんですか？」

「アー」

挿れたままの楔をさらに奥に押し込める動きで腰を使うと、飯山の口からまた色っぽい息が漏れる。

「これもずいぶんと恥ずかしいことだと思うんですけど」

「……バカ」

甘い声で罵られる。

飯山の腕が上がって髪の毛をまさぐられた。少し潤んだ瞳が後ろへと向けられる。

「全然、ちがうだろ……。こうして、二人で恥ずかしいことしてるんなら、キスとか……抱き合おうとか……いくらでも恥ずかしいのごまかせるけど……一人の部屋で熱くなって、恥ずかしいこととして、誰がフォローしてくれるんだよ」

「……なるほど」

フォローがないから恥ずかしいままになってしまうということか。心理としては理解できなかったが、理屈としては通っている。

「でも、もう……このへんにしとこう。もう、放せ……シャワー、浴びて来いよ」

繋がりをほどかれてしまいそうな気配に、杉は飯山の腰を引き寄せた。一人の部屋で恥ずかしがる飯山を想像しただけで軀の芯がまた熱を孕みだしていた。

「え……？」

「あとでまたしっかりフォローしますから」

「え、あ、おい……アウ」

堅さを取り戻してきたもので軀を中から擦ると、飯山はひときわ色っぽい声を上げた――。

そんなやりとりから、今では飯山がなぜ画像付きのネット通話エッチにつきあってくれないのかは理解していたが、

「もうちょっと種類が欲しいなあ」

焼いたCDのコレクションを眺めては呟く杉だった。

* * *

今回は二ヶ月ぶりの香港訪問だった。土日月の三連休に金曜に有給を使って四連休にして、飯山は杉のもとへと飛んだ。迎える杉も金曜の休みを取りたがったが、休日の異なる香港では月曜の休みを取るのが精一杯だった。

到着したその日、勝手知ったるなんとやらで、飯山は杉のアパートに上がり込んで家主の帰りを待つことにした。掃除や片づけが得意ではないらしい杉の部屋は雑然と散らかっている。杉は床にほこりの玉が転がっていても、空き缶の横にクリーニングから戻ったばかりの衣類が置いてあっても、気にならないらしい。

「……まったく」

苦笑まじり、これも惚れた弱みとやらかと自虐的に思いながら、ゴミを集め、本は本、衣類は衣類と分類して相応の場所へ片付けていく。飯山自身は他人に自分のものを触られるのがイヤだから、今までの彼女にも台所の片付けや掃除機をかけるぐらいのことはしてもらっていたが、基本、整理整頓は自分でこなしてきた。が、杉は自分で片付けるのは苦手でもきれいに片付いた部屋は好きらしく、飯山が手をかけた部屋を喜ぶので、今では訪問のたびに飯山は杉の部屋を片

付ける。

ひとわり片付け終わり、飯山はさて、と部屋を見回す。香港の住宅事情は日本以上に厳しい。クローゼット付きのワンルームにシングルベッド、テーブル、椅子、テレビ、パソコン、ラックがちょっと窮屈に置かれている。

部屋は片付いたが、テーブルに置かれたパソコン周りがまだ少し雑然としている。各種メモリーを入れたプラスチックケースの蓋が締まり切らずに中途半端に浮いていた。閉めておくかと手を伸ばして、CDだろうか、細いプラスチックケースが整然と並んでいるのが目に入る。なんの分類だか、赤、透明、青、黒と四色に分けられている。やはりそこも理系だからだろうか、部屋の整理整頓は苦手なくせに、杉は妙なところでファイリングにこだわって、興味のあることは生真面目なほどきちんと分類整理しているようだった。彼の仕事ぶりを見れば、その能力も仕事に役立っているのは間違いないが、もう少し生活全般にその能力を使えばいいのにとも思ってしまう。

——それにしても。

なんのデータだろう？ どの色もかなり枚数が揃っている。音楽か映像か。軽い気持ちで一番端の一枚を取り出した飯山は貼られているラベルを見て、凍りついた。

* * *

今日は飯山さんが……和弘が来ている。

家に向かう杉の足取りはふだんとまったく変わらなかったが、杉の心は弾んでいた。

賢くて、人づき合いが上手で、懐が深くて、そして……杉に対してとても優しい恋人。そう、飯山は優しい。杉は今までに何度かかなり本気で飯山を怒らせてしまったことがある。そのたび、『もうダメだ。嫌われた』と杉が悲しんでいると、必ず飯山のほうから連絡を取ってきてくれる。そして杉のなにがいけなかったのか、本当はどうするべきだったのか、杉が理解できるようにきちんと教え諭してくれるのだ。

飯山のことが大好きだ。そしてもしかすると、飯山も同じくらい杉のことを好きでいてくれるのかもしれないと思う。だからきっと、これからも大丈夫。

どうやら人とは少しリズムがちがうらしい自分はまたきっと飯山を怒らせてしまうだろう。でも、きっと……一生懸命謝れば、飯山は最後には許してくれるだろう。

「だからな……」

少し呆れたように、少し疲れたように、杉のなにがいけなかったのか、教えてくれるだろう。きっと——……。

* 1 (文庫発売時特典小冊子より抜粋)

飯山の年下の恋人、杉 義彦は今年の四月、香港にある東アジア支社に海外赴任し、飯山とは

海をはさんでの超遠距離恋愛となった。

飛行機に乗ってしまえば五時間、新幹線で東京から博多に行くより早いとは言っても、切符一枚あれば東京駅から身ひとつで乗車することができる新幹線と、搭乗前のチェックインから出国審査を経て到着後の入国審査までの手続きを踏まなければならない飛行機では煩雑さは比較にならない。

パスポートがなければ会えない距離。

杉の駐在話に「年上の社会人」として、評価されることのありがたさを説き、好きな仕事を大切にすることの意義を説き、嫌がる杉に「香港に行かないなら別れる」と宣言したのは自分だった。

その判断がまちがっていたとは思わない。

だが……実際に海をへだてて離れてみれば、その寂しさは想像以上だった。

飯山は、理想論で片づけるな、もっと二人の絆を大事に考えると、過去の自分をぐちぐちと責めてやりたい気分だった。

パソコンとネットがあれば、メールはもちろん、カメラを使って顔を見ながらの会話もできる。それでも、海を隔ててちがう国にいる、その距離感はあまりにも大きい。もしこの寂寥感を先に知っていたら、あそこまできっぱりとした態度は取れなかったかもしれないと飯山は思うようになっていた。

会いたい。

モニターとカメラ越しにではなく、じかに顔を見たい。

ヘッドホンとマイク越しにではなく、じかに声を聞きたい。

同じ部屋で同じ空気を共有しながらかわす会話と、便利なツールを使って交わす会話では胸に響くあたたかさがまるでちがう。

そこに、触れたくても触れられない葛藤が輪をかける。

離れて二週間ほどたったある日、杉はモニターに向かって手を伸ばしてきた。

「……あなたに、さわりたいな……」

小さくつぶやいて、向こうの画面に映っているだろう飯山の顔の輪郭を指先でなぞり、唇のあたりをゆっくりと撫でてくる。

「杉」

「あなたにキスしたい。あなたを抱き締めたい」

切なげに訴えて、モニターの平面に指を伸ばす恋人――。触れたいのは飯山も同じだった。キスしたい、抱き締められたい。触れられないと知りながら、モニターに映る愛しい人の姿につき指を伸ばしてしまう杉の姿に、同じ想いを抱く飯山は胸が痛くなった。

「杉、俺も……」

だが。

切なくも甘い、ロマンチックな空気は長くは続かなかった。

「あなたのペニスの形まで忘れてしまいそうだ。ちょっと見せてください」

『俺もおまえに触れたいよ』と続けるはずの飯山の言葉をさえぎり、杉はそう言った。

相手をうっとり酔わせる文学的な修辭に満ちた口説き文句を、杉は持ち合わせていない。実証と事実の確認を何事にも基本とする理系人間である杉は、己の欲望を訴えるにもストレートな言葉を選ぶ。

「は、はあ!？」

飯山は素っ頓狂な声を出した。

「そんなもの! 覚えてなくていいだろ!」

「触れて嬉しいものの色や形を正確に思い出せないのは、寂しいです」

「だから! そんなもの、正確に思い出そうとするな!」

「せっかくカメラがあるんです。見せてください」

「いやだ」

見せることさえ嫌だと言っているのに。

「あなたが自分でこすっているところを、見たい」

杉の要求はエスカレートした。

「そ、そんな……」

「あなたはオナニーしないんですか」

「……オ、オナニーぐらい……するよ、悪いか」

「それを見せてください」

破廉恥な要求をしているのに、モニター越しに見える杉の顔はいつも通りの平静さだ。

「見せるものじゃない」

「見せるショーもありますよ」

「俺のオナニーはショーじゃない!」

ほかに誰もいない自分の部屋で、時刻ももう十時を回っていた。エッチなことをするのに場所も時間も悪くはなかったが、カメラに向かってのオナニーは勘弁してほしい。

飯山が言い切ると、しばし、杉は何事か考える様子だったが、

「あなたがカメラの前でのオナニーを拒否するのは、それが不自然だからですか」

と言い出した。

「ま、まあ、そうだな。不自然だろ、うん」

「じゃあ聞きますが。恋人同士が海をへだてて別れている今の状況は自然ですか」

「……いや、それは……」

「自然じゃないでしょう。自然なら、恋人同士は互いのそばにいたがるものです。ですからぼくとあなたの今の状況は不自然なんです。不自然な状況では、それに適応するために不自然な反応をせざるを得ない。ご存知ですか? 心理学にもあるんです。『人が異常な状況に置かれた時に異常な反応を示すのは正常なことだ』と。いいですか。ぼくがあなたにカメラの前でのオナニーをお願いするのは、不自然な今のぼくたちの状況では無理からぬことなんです。さあ」

さあ、と言われても。

ふだん無口で言葉を操るのが不得手な杉は、しかし、己の欲求を正当化するための屁理屈をこねる時だけ、饒舌になる。飯山はいつもこの手にやられてしまうのだ。そもそも飯山が抱かれる立場になってしまったのも、杉のこの理論武装のせいだった。

「いや、でも……」

もごもごと断る理由を探していると、

「じゃあ、ぼくが先に見せたら見せてくれますか」

杉はもそりと立ち上がった。

「え……」

「今、出します」

言うなり杉はカメラの前でベルトを外そうとした。

「や、やめろっ！ 見せるな！ 見たくないっ！」

モニターを手で覆い、飯山は必死に叫んだ。

「……そんなに嫌がらなくてもいいと思います」

不満そうな杉の声に、そっと手を下げる。杉は椅子に戻ってくれたらしい、仏頂面が見えた。

「見せっことかこすりっことか、中学や高校の部活なんかでは時々あるそうじゃないですか」

杉の言うこともわかるが、じゃあ、二人してカメラの前で……なんて、飯山にはできそうになかった。

「あ、明日……早いんだ。ほら、sweet sweetのオーナーにまた朝一から呼びつけられてて……」

とりあえず、時間を言い訳にする。

「……わかりました」

不承不承の声だった。

「では、次の機会に」

念を押すように言われたが、飯山は「じゃあ、またな」としか、答えられなかった。

「どうしてダメなんですか」

杉の声が低く、乞うような響きを帯びている。

あれから、ネットで話すたび、杉はカメラの前での相互オナニーを持ちかけてくる。

「あなたを見ながら……したいんです。ベッドの中で、あなたの姿を思い出しながら一人するのはもう嫌だ。お願いします」

同じ男だ。杉の感じている虚しさは飯山にもよくわかる。別れて二週間以上たつ。孤閨の寂しさが飯山にもつらくなってきている。男が視覚で興奮を覚える生き物だということも実体験から知っている。

だが……いくら互いの興奮のためとは言っても、カメラの前で性器を出して自分で刺激するのは……恥ずかし過ぎる。

「昔から遠く離れた恋人たちは電話で互いの声に興奮して擬似セックスをしてきました」

杉は言い張った。

「どうしてそれがいけないんですか」

「誰もテレホンセックスがいけないとは言ってない！」

「昔は電話しか、交流のツールがありませんでした。でも今はパソコンがある。こうして顔を見て話をすることができるのに、どうしてそれを利用して互いの欲求を満たしてはいけないんですか」

杉は言い出したら引かない。あくまで最新のツールを使ってのエッチ行為を要求してきた。

「互いの欲求じゃない、おまえがスケベなんだよ。おまえの欲求だろ」

追い詰められた飯山はつい、そう言い返した。

多少のタイムラグのある映像が、それでも不自然に固まった。杉が黙り込んだのだ。

「あ……わ、悪かった」

言い過ぎてしまった。飯山は慌てて詫びの言葉を口にした。

「ぼくは……」

杉が画面の中でうつむいた。顔が見えなくなる。

「ぼくは、スケベでしょうか」

「杉……」

「ぼくだけが、エッチなことをあなたとしたいと望んでるんでしょうか」

そばにいたら、『ごめん、そんなことはない。今のは言い過ぎだった』と杉の頭を胸に抱えていただろう。そばにいたら、体温を伝えて、言葉では補いきれない部分を相手に与えることができるのに。

願ってもしかたのないことを飯山は願う。

「悪かった。俺が言い過ぎた」

マイクに向かって、飯山は優しく優しく、語りかけた。体温や仕草で伝えられない部分を伝えたくて。

「俺だって、おまえと抱き合いたい。俺もしっかりスケベだよ」

ヘッドセットについてマイクに向かってしみじみと訴えると、

「……本当に？」

ようやく杉が顔を上げてくれた。

「本当だって」

「けど、それならどうして、距離を埋めるためのツールを使うのを嫌がるんですか？ やっぱりぼくのものが見たくないから……」

杉がなにかわけのわからないことを言いかけていたが、

「だから、それは！」

飯山は遮って大声を上げた。

「は、恥ずかしいだろ！ カメラの前で、あ、明るいところで、自分で見せるんだぞ！ おまえは今までも見せてきたじゃないかって言うだろうけど、エッチの流れの中で見られるのと、自分からカメラの前に出すのでは全然ちがうんだよ！ 恥ずかしいんだよ！」

「恥ずかしい？」

杉の、驚いたような声が返ってきた。

「恥ずかしい？ だからですか？ ぼくの要求を拒否したのは」

「悪いか」

「なんだ。恥ずかしかったんですか。それならそうと言ってくださればよかったのに。恥ずかしかったんですか。なんだ」

なんだって、なんだ。飯山はそうツッコみたかった。

「わかりました。恥ずかしいことを要求してすみませんでした」

杉の声はどこまでも明るい。

「最初に見せるなっておっしゃったから、あなたはぼくのものを見るのがそんなに嫌なんだと思ってました」

.....そうだった。こういう誤解を平気でする男だった。

「あのな.....見るのも嫌なものを.....」

言いかけて固まる。

「嫌なものを.....なんですか？」

杉が先をうながしてくる。

ここでヘンなごまかし方をすれば、また妙なすね方をされてしまう。飯山は腹をくくった。

「見るのも嫌なものを、その.....く、口でしたり、じ、自分の軀の中に、その.....い、挿れさせるわけないだろう！」

数秒ごとに画像が静止しているように見える画面なのに、その瞬間、ぱあっと杉の顔が輝いたように見えた。

「飯山さん！どうしよう。今すぐあなたを抱きたい。あなたを抱きたい」

「.....俺だって抱かれないよ」

うかされたような杉の声に、飯山もぼそりと返す。とたんに恥ずかしくなって、

「も、もう今日は切るぞ」

飯山は杉の返事を待たずに通話終了をクリックした。

すぐに携帯電話がメールの着信音を響かせた。杉からだった。『いきなり切られて悲しいです』とある。

『悪かった。なんていうか、ちょっと、テレた』

正直にそう返すと、またすぐに返信があった。

『今夜は寝られそうもありません』

『俺も、かな』

『あなたを抱きたい。それが無理なら、せめてあなたの声を聞きたい』

なんと返そうか、迷っているとまたすぐメールが来た。

『カメラの前がお嫌なら、声だけでも、ダメですか』

迷って飯山は『声だけなら』と返した。

すぐに、オフラインにしていなかった通信ソフトが着信音を響かせた。

「……はい」

再びヘッドセットをし、ノートパソコンの置いてあるローテーブルの前にあぐらをかく。

「声だけなら、いいんですか？」

杉の、もう欲情をはらんだような、湿って熱い声がした。

「あなたのイイ声を、聞かせてもらえますか？」

飯山はぎゅっと目を閉じた。

そんなこと、いちいち最初に断ってこないでほしい。流れの中で自然にそういう形になればいいのに。

「……それも、嫌ですか」

少し落胆したような杉の声。――ちがう。飯山も、声だけでいい、抱いて抱かれて、二人して気持ちよくなりたい欲求はあった。

「い、嫌じゃない。……もう……勃起かけてる」

思い切って自分から流れを作ってみる。

ぼくもです、と喉声で囁かれて……飯山はそれだけでじわりと自分の性器がさらに熱を帯びたのを感じていた。

「今は、スエットですか？ それを少しだけ脱いで……」

「握って」

「堅い？ まだ、柔らかい？」

杉の指示通りに手を動かす。

時々かすれる囁き声に、どうしようもなく感じてしまう。

「ま、だ……少し、柔らかい、かな……」

「じゃあ、しごかないと」

笑いを含んだ声が返ってくる。

「でも、手を早く動かしちゃダメですよ。ゆっくり……下から、上まで……ゆっくり」

「ん……」

吐息に甘い響きの音が混ざる。

「す、ぎ……早く、したい……」

「ダメです。ゆっくり」

「あ……」

じりじりと動かす指の輪の中で、ペニスはもどかしさに熱を集める。

「ぼくも、上を向いてきました」

報告に、手の中のものはまたさらに硬度を増した。

「杉……杉のも、熱い？」

「熱いですよ」

「俺、も……熱い……」

「上の……穴のところ、弄ってみて」

「……あッ……うん…！」

「その切れ込みみたいところ、くりっと指を走らせてください」

「ああ、や、ア……ん！」

指示のいやらしさに感じ、杉の言葉をなぞる指の動きに感じる。

「杉、杉……も、う、ぎゅっぎゅってしたい……！」

「いいですよ。思い切り、しごいてみて」

「あ、あ、あ……はあッ……あ、んー！」

「飯山、さん……ぼくも、熱い……」

乱れた息遣いがヘッドホン越しに伝わってくる。一緒に感じている、その感覚に、もう我慢できなかった。

「杉、杉……好き、好きだ！」

「ぼくも……ぼくもです」

「あ、あーっ！」

どくどくと白濁を吹き上げる己のペニスを見ながら、「ん！」、杉の極まった時の息遣いを感じる。

「……ん……」

はあはあと荒い息だけを響かせ合う。

虚しいばかりの己を慰める行為が、分かち合えた実感に、いつもとちがうものになっていた。

「杉……」

「あなたが、好きです」

年下の恋人の声にうなづく。

「また、しましょうね」

今度はうなづく代わりに、小さく笑い声を返した。

end

2010. 10. 31 イベント無料配布本

響く鐘の音、親族や友人たちの拍手と歓声、華やかに撒き散らされるライスシャワー。白いレースと金のティアラ、純白のウェディングドレス姿の花嫁、光沢のあるシルバーの燕尾服とスタンドカラーのドレスシャツに身を包んだ花婿。教会の扉から腕を組んで出てきた新郎新婦は参列者たちを笑顔で見回したあと、互いの顔を見て、また微笑む。

誰もが「素敵だ」と褒める要素を盛り込んだ、素晴らしい、けれどありふれた結婚式。

それは安西琢磨の理想の結婚式だった。

どうせ結婚するなら、式も披露宴もできるだけ盛り上がるもののほうがいい。ジミ婚だかなんだか知らないが、入籍のみだとか、身内だけの食事会でのお披露目だけだとか、そんな「名よりも実を取る」方式なんて、つまらない。そもそも「実」がないのだから、せめて見かけは装えるだけ豪華に装って、「人並み」というのを愉しみたい。

安西は己の左腕に柔らかく右手を添わせている新婦を見やる。

新婦も安西を見上げる。

—みんな、だまされてる。

新婦の瞳の奥にも安西と同じ、いたずらっ子のような光がある。

「結婚式は派手にやりたい」

と安西が言った時、彼女は大喜びで賛成してくれた。どうせお祭りなのだから楽しくやりたいと言ってくれた彼女とは、ものの考え方がよく似ている。価値観が同じなのだ。セックスはありえなくても、人生のパートナーとしては最良の相手と出会えたと思う。

彼女とはゲイバーのパーティで出会った。その頃、つきあっていた男と参加していた安西は、同じように女同士のカップルで参加していた彼女を見て驚いた。見知った顔だったからだ。

彼女も目を丸くしていた。やはり取引先の会社の人間に出会うとは思っていなかったようだ。

同性愛者だという秘密を共有するようになったふたりは、それからたびたび「デート」するようになった。互いに、決して恋愛対象にならないと承知の上でつきあえる異性の友人は貴重だったし、気楽だった。そうして親交を深めてみれば、人生の優先順位のつけ方に共通点が多いのがわかり、偽装結婚の相手としては最良だろうと、ふたりは結婚に踏み切ることにしたのだった。

互いの家族を安心させ、職場でも既婚者として見られ、そのかたわら、干渉されることなく今まで通りの恋愛を愉しむことができる—この結婚はふたりのどちらにとっても、望ましいことばかりだった。

「安西、おめでとう！」

参列者の中からかけられた声に、安西は笑顔で応じる。

「飯山、次はおまえだぞ！」

気安く、そんな言葉を返す。

飯山は変わらぬ笑顔のままだが、安西は自分の言葉が彼の胸に刺さった手ごたえを感じ取る。

—俺の読みがはずれていなければ……。

飯山が「次」になるはずはなかった。やはり男とつきあっている彼が。

飯山和弘とは同期入社だった。ハンサムで気さくで明るいオーラを持つ飯山を、安西は一目で気に入った。友人としてつきあってみれば、飯山には適度な要領よさと適度な責任感、そして卑怯なことは決してしない男気があるのがわかり、ますます気に入った。――いや、好きになった。

しかし、思春期の初恋以来、ゲイの自覚を持って生きてきた安西は、いわゆるノンケに恋するのがどれほど虚しく、かつ、傷つくことかをイヤというほど学んでいた。それに、職場にはそれまでの出会いの場であった学校とはちがい、卒業というものがなかった。途中でリストラされたりしなければ、定年までの数十年を過ごす場所。そんな場所で望みのない恋愛を仕掛けて居づらくなったら、どうすればいいのか。万一、人の噂にのぼるような展開になったりしたら、逃げ場がない。

安西は飯山への好意はほどほどにとどめ、友人としてのポジションキープに徹することにした。職場での同性同士の恋愛など、リスクー過ぎる。

それに、肝心の飯山に同性愛の気配がまったくなかった。

入社時、飯山には大学時代からの彼女がいて、週末はどちらかの部屋で一緒に過ごしていた。連休ともなれば泊まりで旅行にも出かける。いわゆる「大人のつきあい」をしている飯山に安西がつけ入るスキはなかった。

そしてまた、安西がそれとなく話題を振って探ったところ、思春期や学生時代に時々ある同性同士でのセクシャルな体験というものも、飯山にはないようだった。つい好奇心がおもむくままに友人同士でキスを試してみるとか、溢れる若い欲望のままに先輩後輩とこすりっこしてみるとか、Hなビデオを見ていて大オナニー大会になってしまうとか、そういう類の経験が飯山にはないという。ヒナの刷り込みではないが、安西の印象では、最初に男同士でセクシャルな経験をした者は同性愛行為に対してもハードルが低い。飯山はその面でもスキがなかった。

ならば、友人のままでいい。安西は割り切った。

もともと、無駄なことにエネルギーを費やすのは嫌いな性質だ。いくら好みのタイプでもノンケ相手に無駄にしかならない恋情を燃やすより、そこそこ趣味の合う相手とそこそこにつきあい、エッチを愉しんだほうがいい。安西はそういう割り切りが得意だった。

気軽に呑みに誘い誘われ、時には恋愛相談も持ちかける、安西は飯山と気のおけない友人関係を築くことに成功し、その関係に満足した。

そう、満足していたのだ。

ある日、「あれ？」と違和感を覚えるまでは。

入社して四年がたっていた。その間、飯山は大学時代からつきあっていた彼女から数えて三人の女性と出会って別れていた。

最後の彼女と別れて半年ほどの頃だったろうか、安西は飯山に「いいコ、いない？」と紹介を

頼まれた。それまでも一緒にコンパに出たり、互いの大学時代の友人たちと、男女とりまぜてアウトドアのレジャーに出掛けたりしていたから、その依頼は不思議なものではなかった。

友人として傍らで見てきて、飯山は安心して女性にオススメできる男だった。女性とのつきあいはあくまでスマートで、かつ誠実だからだ。安西は大学時代の女友達をひとり、飯山に紹介した。

意外だったのは、その女性からの事後報告だった。

「悪い人じゃなさそうなんだけど……」

飯山と会った彼女は電話の向こうで歯切れ悪く言葉を呑んだ。

「なんか、冷たい感じの人じゃない？ わたしがタイプじゃなかっただけかもしれないけど……話をしても、ノリが悪いっていうか……」

それは安西にとって意外な言葉だった。客とじかに触れ合いたいと本人が希望して支社の営業に配属された飯山は、人あしらいがうまい。初対面のメンバーばかりのなかでも如才なく会話をつなぎ、本人も周りもリラックスして楽しそうにみせる。

その飯山が？

「一応、また今度とは言ったけど……たぶん、向こうからももう連絡はないと思うわ」

自分から女性を紹介してほしいと言っておいて？

それが安西が初めて飯山に違和感を覚えた「事件」だった。

――安西には知りようもなかったが。その頃、飯山はひとつ年下の男性への欲望と執着を自覚し始めたところだった。不器用で、腹が立つほど融通のきかない、機械バカ・杉義彦への気持ちに気づき、あわてた飯山は安西に女性の紹介を頼んだのだった。

そうとは知らぬ安西が、次に決定的な「違和感」、いや「確信」を得たのは、それから一年近くたった時のことだった。

香港出張を終えて帰って来て間もなくの日だった。

フロアの隅に並ぶミーティングブースの前を通りかかった安西は、なにやら荒い言葉を耳にした。

「もういい！」

あれ？と思った。飯山和弘の声に似ていたからだ。だが、五年に及ぶ友達つきあいの中で、飯山のそんなきつい声を聞いたのは初めてだった。

「い、飯山さん！」

うろたえたように呼び止める声にかまわず、ブースから飯山が出て来た。怒りのオーラをまとっている。

「ようおう」

安西は軽く手を上げて見せた。

「飯山、本社に来てたのか。声かけてくれよ」

「安西」

飯山が振り返る。その飯山を、

「ま、待ってください……！」

追いかけてブースを出てきた男を見て安西は驚いた。設計の杉だったからだ。支社にいる飯山との接点が見えない。

「杉君じゃん。なに？ 知り合い？」

「ああ、去年、客先でトラぶって……」

にこやかに杉とのいきさつを明かす飯山からは、先ほどの荒い口調をうかがわせるものはなにもない。さっぱりした顔を見ているとあの声は聞き間違いだったような気がしてくる。

だが、飯山のように腹芸ができないらしい杉は堅い表情で飯山の横顔をじっと見ていた。その表情と雰囲気には、とても仕事の打ち合わせをしていたとは思えないものがある。

「また呑み行こうぜ」

「ああ、メールする」

揚げ句、そんななにげないやりとりにさえ、杉は食いついてきた。

「呑みに行くんですか」

きつい口調で、まるで尋問のようだった。

「え、ああ……杉君も一緒にどう？ 飯山と呑んだことはある？」

その安西の問いかけにも、杉は厳しい表情を見せた。

「はい、何度も」

まるで、『おまえなんかより、俺はずっと飯山さんと親しいんだ』と言外に宣言されているようだった。

飯山はあくまで軽く自然な流れに会話を持っていくが、杉の堅い表情と声だけで安西が違和感を覚えるには十分だった。

——なにかある？

そんな疑問を持って、安西は飯山と杉とその夜、呑みに寄ったのだった。

抑えつけていた下心とは別に、安西は純粋にビジネス上の話として、飯山の本社営業への移動と杉の香港駐在を望んでいた。どちらの話も、飯山や杉のサラリーマンとしての将来に有利になる話だという確信もあった。

酒席で、杉に対する飯山の反応をそれとなく探りながら、安西はその話を飯山に振ってみた。杉に関しての話題には当たりさわりのない相槌しか返してこなかった飯山は、安西が本社への移動を勧めると初めて驚いた顔になった。

「本社？ 俺が？」

「おまえみたいに現場をしっかりとやったあとに、本社来てみるよ。おもしろいぜ？」

これは本心からの言葉で安西がそう言うと、飯山は考える顔つきになった。

「本社の営業かあ……」

新宿支社での飯山の活躍は安西も知っている。支社に埋もれさせておくには惜しい人材だと思

っていたから、安西は言葉を重ねて本社移動を勧めてみた。そして、再びさりげなく杉のことに話を戻す。

とたんに歯切れが悪くなる飯山に、昼間感じた違和感が胸の中で膨らんだ。

「なあ」

熱心に杉の香港駐在を勧めるフリで、安西は飯山の肩に腕を回した。これまでのつきあいの中で、友人を装ってのスキンシップならば飯山が警戒もせずに受け入れてくれることはわかっている。

「おまえからも説得してやってくれよ」

「ああ……」

熱のない返事。

飯山の態度にも言葉にも、これといって怪しいものはない。だが、杉のことを話題にしている時に限って、飯山が決して自分の目を見ようとしないうちに、安西はその時気づいた。

飯山がこちらを見ようとはしないのをいいことに、口では熱心に杉が香港に行くことのメリットを説きながら、安西は飯山の横顔を舐めるように見た。

前から思っていたが、飯山は肌が綺麗だった。間近で見ると、顎から首にかけてのラインがとにかく滑らかで、肌理の細かさといまわって、つい吸いつきたくなるほどだった。

――前からコイツ……。

柔らかそうな耳朶にも視線を這わせつつ、安西は疑問を抱く。――前から、こんな、色っぽかったっけ……？

「……お話が、弾んでいるようですね……」

後ろから声をかけられた。トイレに立った杉が戻ってきていた。

せっかくの飯山との時間を邪魔されたと、その時、安西は感じたが、振り向いて見た杉の瞳にはそれ以上の怒りの色があつた。

――その人にふれるな！

独占欲と嫉妬に暗い炎の燃え立つ瞳は、安西にそう告げている。

その時、安西の手の下で、小さく飯山の肩が揺れた。何かまずいことでも起こったかのように。

――ああ。

瞬間に安西は悟っていた。コイツら、できてんだ、と。――そうか、コイツら、そうか！

にやりとしたくなるような、黒い喜びのようなものが込み上げてくる。

「おお！ 主役主役！ おかえり～」

隠された関係を嗅ぎ取った喜びか、それともずっと欲しいと願いながらあきらめきっていたものが、自分と同じフィールドにあると知った喜びか、とにかく、少し意地悪い笑みが浮かんでしまいそうな顔に、安西は無邪気を装った笑いをまとった。

おさまらない杉が絡むような物言いをしてくるが、それも軽く笑って流した。

その安西の、何も気づいていないフリは飯山にとっても都合がよかつたらしい。彼もまた、かすかに震えた肩などなかったように明るく調子を合わせてきた。

「じゃあな～、お疲れ～」

最後に駅の階段口で手を振るまで、安西は自然体でノリよく振る舞った。飯山と杉の秘めた関係に気づいたことなど、おくびにも出さずに。

「ああ、またな」

手を振り返す飯山はあくまで爽やかな、安西好みの好青年だ。

その後ろから、暗く厳しい視線で安西と飯山を見る杉。

『おまえ、今晚、大変なんじゃないの？』

電車の中から、飯山にそうメールを送りたくなるのを、安西はこらえた。くつつつと笑いながら。

少し社内で聞きまわれば、一年前の客先のトラブルが元で飯山と杉が知り合ったことも、それを契機に杉が垢抜けてきたことや、定時後の杉がよく新宿支社まで出向いていることまで、かんたんに把握できた。

――ゲイの要素はないように見えたのに。

安西が悔やむとすればその点だった。口説いて落ちる相手なら、口説いておきたかった。

『いや……俺の目に狂いがあったわけじゃない』

浮かぶ後悔を安西は否定した。

安西と出会った時の飯山には同性からの求愛を受け入れる余地はまるでなかった。その見立てにまちがいはない。

飯山は変わったのだ。杉と出会って。それまで女性としかつきあったことのなかった飯山は、おそらく杉と出会って初めて、同性との恋愛に踏み込んだのだ。

『ほっとけなかったのか……』

なんとなくわかる気がした。杉の物慣れない感じ、設計者らしい、融通のきかない、まっすぐな思考回路。今の杉は設計のなかではずいぶんと話しやすい部類に入るが、それでも生まれながらに社交性というものを持っているタイプにはとても見えない。

そして飯山には面倒見がいいところがあった。要領はいいのだが、どこか割り切りが甘い。そんな飯山は仕事で知り合った典型的な理系人間である杉を、ほっておけなかったのではないだろうか。

杉の不器用な人づき合いに怒り、呆れ、そうこうしている間にほっておけなくなって、あれこれ口を出して、手を出して……。

安西には、飯山の心理がわかるような気がした。そして杉が、そんな飯山になつて、甘えるようになってしまったのだろう経緯すら、安西には想像がついた。

無口で表情の変化に乏しい杉。ああいうタイプは思い詰めると一筋になりやすい。杉にぐいぐい迫られて、飯山は押し切られてしまったのではないだろうか――。

実際には先に杉への恋心を自覚したのは飯山のほうだったし、押し切られたというより、喜んで受け入れたというほうが正しかったが、安西の想像も大ハズレというわけではなかった。

香港への駐在話を勧めるついでに、飯山に杉のことでカマをかけてみたが、さすがに表情を取り繕うことに長けた飯山は尻尾は出さなかった。しかし、やはり杉のことを話題にしている時は視線を避ける様子に、安西の確信はますます深まる。

いずれにせよ、飯山が杉とつきあっているという事実は安西にとっては喜ばしいものだった。今までは飯山にはとても男同士の情事は受け入れられないだろうと思って、健全な友人関係に甘んじていたのだ。男同士でもつきあえるというなら、話は別だ。

女性としかつきあったことのない男をベッドに連れ込むより、男とつきあっている男をその恋人から奪うほうが、はるかにかんたんだ。

しかも相手は人間相手より機械相手のほうがイキイキする杉だ。

この勝負、もらった。

安西はひとり、笑った。

* * *

安西らしい、そつのない、華やかな結婚式と披露宴だった。

新婦もいかにも安西と似合いの、雰囲気のある柔らかな美女で、友人の新たな門出を祝えてよかったと、飯山は心から思った。

思ったが……。

帰宅後、飯山はネクタイを緩めただけのフォーマルスーツ姿のまま、どさりとカウチにもたれこんだ。

「あの……」

あとから部屋に入ってきた杉が、引き出物の袋を床に置きながら目をぱちぱちさせる。

「スーツは脱いだほうが皺になりません……」

こんなところだけは細かい男に、溜息が出る。

「いいよ。どうせクリーニングに出すんだから……」

投げやりに答えるのに、相手の顔色を読まない男は、

「素敵な披露宴でしたね」

などと、飯山がそっとしておきたい話題を持ち出した。

その日、安西の結婚式に、同期で同僚でもある飯山は教会での式からバスで移動してのホテルでの披露宴まで出席し、杉は披露宴のみ招待されていた。杉が出席を了承すると、安西は日本への出張を杉の予定に組み込み、香港駐在中の杉が自費で帰国しなくても出席できるように段取りをつけてくれた。

そんな気遣いを受けての披露宴に、杉が褒め言葉を口にするのは当然だった。それはわかっているながら、

「……ああ」

飯山の応えは気の重さそのままに無愛想なものになった。

いつにない飯山の態度に、杉がまばたきする。どうも様子がおかしいとは思っているらしい。

「……あのな」

飯山は軀を起こすと膝に肘をついた。

「今日、式のあと、安西に言われたんだ。次はおまえだなって」

「……次、とは？」

「結婚式だよ」

「……………」

意味が通じていないのか、反応のない男にイラッとくる。

「だから。次に結婚式を挙げるのはおまえが順当だろうって、そういう意味だよ。そろそろおまえも身を固めろって、そういう意味だよ」

「……それは……」

言いかけてやめた男を見上げる。

「それは？ なんだよ？」

「……あー……」

「なにか言いかけたろ。言えよ。なんだよ？」

イラついた気持ちのまま、問い詰めた。杉は何度かのまばたきのあと、口を開く。

「それは……無理ですよ」

「は？」

杉相手にはよくあることだったが、音は聞き取れても意味がわからない。発言の意味するところがわからなくて、飯山は剣呑に声を上げる。

「無理？ なにが無理なんだ」

「……結婚式とか……身を固めるとか……」

無理、と言い切られてしまって、瞬間、言葉を失った。飯山の沈黙をどうとったのか、

「ぼくたちは男同士だし……そういうのは……」

杉は居心地悪そうにしながら、さらに言葉を継いだ。

「……そうだよな。俺たちは、無理だよな」

当たり前といえば当たり前のことなのに、飯山の声は低くなった。無性に胸が痛む。

「おまえと俺は男同士なんだから……無理だよ、そんなの。わかってるよ」

「飯山さん、結婚式を挙げたいんですか？」

無神経な男の質問に胸の痛みが増す。

「誰がそんな……」

「男同士の式でも挙げさせてくれるところがあるって聞いたことがあります。探しましょうか」

ちがう！ そういうことじゃない！ 激しく首を振りたい衝動を飯山はこらえる。

見上げる杉の顔には飯山を気遣うような色がある。——そうだ、この男にとっては、それだけのことなのだ。

苛立ちとわけのわからない胸の痛みにさいなまれながら、飯山は自分と杉のちがいを噛み締めた。飯山にとっては「世間」や「人並みの人生」というものからのプレッシャーを感じずにはいられなかった安西の言葉も、杉にかかれば「無理」の一言で片がつく。そして、それで飯山が

落ち込めば、「式を挙げましょうか」となる。

杉にかかれば、なにもかもがシンプルでかんたんだ。

しかし、シンプルでかんたんに割り切れない自分の思いはどうなる？

杉がひとりっ子だと知った時の重い衝撃を飯山は思い出す。妹がいる飯山とちがい、杉はひとりっ子だった。自分が男同士でパートナーを見つけてしまった以上、老親に孫を抱かせる望みは消える。それでも妹が無事に結婚してくれれば、たとえ長男の飯山に嫁や孫がいなくても、親には家の血が続いた喜びを味わってもらえるだろう。だが、杉は？

「なぜ飯山さんがわたしの親の心配をするんですか？」

口ごもりながら謝った飯山に、杉は心底不思議そうな顔をした。

杉の親へ、そして脱線させてしまったかもしれない杉の人生へ、申し訳なさを覚える飯山の感覚は、どれほど説明しても杉には理解してもらえなかった。

思い悩むほうがまちがっているのだろうか？ 「ぼくたちは男同士だから、無理」、そうあっさり片付けられない自分がおかしいのか？

「飯山さん、式を挙げたいなら……」

重ねて言うてくる男に、暗い気分で首を振って見せる。

「ちがう。そういうことじゃないんだ……」

「あの……」

「悪い。ひとりにしてくれ」

突き放すように言って、飯山は立ち上がった。杉の前をすり抜けて、ひとり、寝室へと向かう。

ドアを閉め、少し迷って鍵もかけた。

今は杉の顔を見たくなかった。

「きのうはありがとうな」

次の日、出勤して一番に安西にそう声をかけられた。

「素晴らしい式と披露宴だったよ。改めておめでとう」

きのうからの重い気分を押し殺し、表面はにこやかに返す。

「けど、おまえ、今日ぐらい休めばよかったのに」

「向こうも決算前とかで出勤だしな。ひとりで新居にいてもしょうがないし」

そんなものかなあと飯山は思ったが口には出さない。新婚旅行は長期の休みが取りやすいお盆合わせで行くという安西夫妻は、さばさばと合理的な考え方で新家庭を築いていくらしかった。

「まあ、結婚したからってなにが変わるわけでもないしさ。これまで通り、変わらず頼むよ」

安西はそう言うが、結婚したとたん、つきあいが悪くなる友人は多い。こちらとしても、既婚者を今までと同じペースで飲み会やコンパにつきあわせるのは気がひけた。

ところが、安西はそのままぐっと顔を寄せてきた。肩を抱かれる。

「な、早速、今夜どうよ？」

「いや、さすがにおまえ……」

驚いた。新婚一日目で誘われるとは思っていなかった。

「向こうも残業で遅いんだよ。お互いさあ、結婚しても縛ったり縛られたりしたくないんだよ、俺たちは。結婚っていうより、ルームシェアに近い感覚かな」

「そんな……」

驚いて間近にある安西の顔を凝視してしまう。いくらさばさばと合理的でも、ルームシェアはないだろう。

「ルームシェアは言い過ぎだけどさ……それぐらいの気持ちでいてほしいってことだよ」

「あ、ああ、それは……」

「いつでも誘ってくれていいからな」

いたずらっぽく笑って、安西は離れていった。ぼんぼんと飯山の肩を叩いて。

飯山も席についてPCを立ち上げる。溜息が出た。

どれほど言葉を尽くしてもどこか通じない杉とちがい、安西はこちらの表情を読んで意を汲み、さらに己の感情を的確に伝えてくる。正直に言って、つきあいやすい相手だった。

安西ほどとは言わない。言わないが、その半分でもいい、杉にコミュニケーションスキルがあれば……。

考えても埒のないことをつい考えてしまう。

昨日だって、杉がもう少し飯山の気持ちを汲んでくれたら……気持ちに寄り添ってくれたら、飯山も鍵をかけて部屋に閉じこもらずにすんだ。

揚げ句、杉はトイレに出て行った飯山に、クソ真面目な顔で、

「今度、パンフレットをもらってきます」

と言ったのだ。

「パンフレット？ なんの？」

「だから……式場の」

そう答えた杉に飯山は脱力するしかなかった。

「別に俺は式を挙げたいわけじゃないって、さっきも言ったよな？」

「でも……」

さらになにか言おうとする杉を、飯山はさえぎった。

「そうだ、いつもこっちに来てばかりじゃおかあさんたちに悪いだろう。今日ぐらい、実家に帰ったらどうだ」

おためごかしで、強引に『帰宅勧告』した。バカだけれど素直な男は飯山がそう言うと、後ろを振り返り振り返り、帰って行った。

杉が香港に駐在して一年。海をはさんでの遠距離恋愛は時折、どうしようもない寂しさを感じさせるが、その分、互いへの想いと絆を常にどこかで意識していられた。かんたんに会える距離ならかんたんにすませるメールのやりとりも、離れていればこそ、丁寧に想いを込めておこなう。数ヶ月に一度の逢瀬だってそうだ。食事ひとつ、キスひとつ、それまでの空虚を埋めるように、大切に互いに向き合う。――その分、杉の求め方や行為が執拗で、濃厚なものになってしまう

のには、少々困らされることもあったが。

今回のような日本への里帰り出張や、正月休みなどは滞在期間が長くなるとはいえ、それでもせいぜい一週間程度のことだ。限られた時間だから、できれば毎晩でもふたりの時間を過ごしたいし、今までは実際にほとんど毎晩、杉は飯山の部屋に泊まっていた。

だが、今回は……。

男同士で恋人としてつきあっている自分たちにとって、「結婚」は微妙な問題だった。安西からの「次はおまえだぞ」という、当たり前といえば当たりの言葉に、飯山はどうしても引っ掛からずにはいられない。杉とつきあっている以上、周囲に祝福されての「結婚」など、ありえないからだ。――今はいい。自分も杉も、まだ若い。だが、五年後、十年後には？ 周囲からのプレッシャーは強くなってはいないだろうか？ 自分たちはどこまで「世間」に対してこの恋を守ることができるだろう？ ……いや。その頃にはもう杉と別れてしまっているかもしれない。そうしたら、自分たちはそれぞれ大手を振って、両親や友人たちに祝福されて女性と「結婚」するのだろうか……？

その想像に、飯山の心はズキッと痛んだ。

本当なら今はなんの問題もない杉との交際。なのに、安西の結婚式を契機に、飯山の意識は自分たちの将来へと向けさせられ、心揺らされずにはいられない。

なのに、杉はその機微を理解してくれないし、歩み寄ってもくれないのだ。誰が自分たちも結婚式を挙げたいなどと望むものか。誰がそんな話をしている！

思い出すと憤りまでよみがえる。

いつもなら、寸暇を惜しんでふたりの時間を過ごす杉の帰国。だが、今回は一緒にいても穏やかな時間を過ごせるとは思えなかった。

飯山自身も持て余す、込み入って微妙な心理を、あの機械バカに理解してもらうには、どれほどのエネルギーを費やさねばならないか……。

それを思うだけで、気が滅入った。

杉のように面倒じゃない、気軽な相手と、気軽に時間を過ごしたい――そう思ったとき、ちょうど斜め向かいに座る安西の顔が目に入った。

ノリのよい、けれど気遣いもできる安西との酒はいつも楽しい。

「安西」

小声で飯山は呼びかけていた。

「今夜、ホントにいいのか？」

* * *

同期の飯山と設計者の杉がどうやらつきあっているらしいと察知して、早二年と余。

杉が香港に駐在してからでも二年近くになるだろうというのに、いまだに安西は飯山を落とせないでいた。

一年前、飯山が新宿支社から移動してきて同じ部署になった。逆に、その近しさが障害になっていると、安西は恨めしく思う。

同じ部署で、仕事を引き継ぐ関係になって、友人としては以前より格段に接点が増えた。だが、その分、変なアプローチをしたときの相手の反応や周囲への影響を考えねばならなくなった。

その上、飯山にはスキがなかった。

恋人と離れ離れに暮らしていれば、多少スキができて当たり前だと思うが、飯山にはそういう脇の甘さがまるで見つからないのだ。たとえば呑みに出た時に、スキンシップに飢えているところを見せるとか、家に帰りたがらないようなことをほのめかすとか、ちょっとイケナイ遊びに興味を示したりということが、飯山にはまるでない。

女性相手に交際している時も、飯山は誠実で浮気など決してしない男だったが、杉が相手になってから、よりガードが固くなっているように安西には見える。

それは杉が自分に対して警戒心を持っているせいもあるだろうか……。

自分が飯山と杉の関係に杉の嫉妬心から気づいたように、どうも杉も自分の下心に気づいているように思える。

確かに、友人のじゃれあいを装って飯山に触れることは多かつたし、そういう時、シャツの下にある飯山の軀の感触や温かさを愉しんでいないと言えは嘘だ。杉はそんな安西の飯山への下心を敏感に嗅ぎ取っているのではないか。

『気をつけろとか言ってんのかな』

実際には気をつけろどころではなく、安西への嫉妬から杉は飯山をレイプ未遂の目に遭わせ、逆襲をくらって頬を腫らす羽目になったのだが、それも安西は知らぬこと。とにかく火のないところに煙を立たせまいと、飯山が親しいながらに安西とのつきあいにはきっちり一線を引くようにしていることも、安西は知らぬことだった。

『せっかくダンナが海外赴任してんだから、ちょっとは羽目を外せばいいのに』

安西のそんな思いは日々募るばかりだった。

彼のいる安西と、彼女のいる彼女の、それぞれの同性愛性向を隠すための結婚は、安西の飯山へのアプローチを容易にしてくれるだろうと安西は踏んでいた。

結婚までしているのだ、この男は自分には迫ってこないと思い込んでくれていたほうが、仕掛けやすいはずだった。

さあ、これからはどんどん攻めるぞ！と、心弾む思いの安西に、どういう風の吹き回しか、

「今夜、ホントにいいのか？」

と飯山が声をかけてきてくれた。

杉の帰国中に飯山のほうから誘ってくるなど、ついぞなかったことだ。昨日の披露宴では隣り合わせた席次にしたふたりは、ごくごく自然に仲のよい同僚のように見えたが、帰宅後、なにか揉めたのだろうか。

確かめようはないが、もしも自分の「次はおまえだぞ」という一言がきっかけでふたりがぎくしゃくしたのだとしたら、狙い通りだった。

就業後、フロアを出る時に、

「でも、ホントに今夜よかったのか？」

飯山はそれでも心配そうな顔を見せた。

「いくら奥さんが残業でも……帰りを待っててやらなくていいのか？」

「だからさ」

気安く肩に手を回して、安西は飯山を軽く揺すった。

「俺たちはそういうんじゃないだって。縛ったり縛られたりしたくないってのが、俺たちふたりに共通の願いだからこそ、結婚したんだから」

「でも……」

「じゃあさ」

飯山の心配を逆手にとる方策を思いつき、安西はにやりと笑った。

「呑んだあと、ちょっとウチに寄ってくれないか。もしも彼女が先に帰ってたら挨拶してくれよ」

新妻は安西と知り合う前からの恋人の部屋に住んでいる。新居は実質安西ひとりの家だった。もちろん、親戚その他が来たときのために、寝室には枕をふたつ並べたダブルベッド、洗面所にはピンクとブルーの歯ブラシを用意し、食器もすべてペアで揃えておくという準備にぬかりはない。

「それなら……」

呑んだ後に立ち寄るといふ案に、飯山はようやく納得した顔になった。

その夜は、安西は一軒目からにぎやかな居酒屋ではなく、静かで落ち着けるバーを選んだ。

「今日はおまえ、ゆっくり呑みたそうな顔してたからさ」

並んでカウンターに掛けて言うと、

「おまえは察しがいいなあ」

飯山は少し驚いたような笑顔を浮かべた。

「なにか話したいことがあるんじゃないのか」

水を向ける。

「……いや……新婚ほやほやのおまえに言うことじゃないが……」

グラスを手に、飯山は整った顔をわずかに曇らせた。

「結婚って、俺、ちゃんとできるかなあってさ……」

安西は内心のほくそ笑みたくなるような思いを隠す。

「それこそ早々と結婚しちゃった俺が言えるこっちゃないが、結婚なんて勢いだぞ。『ちゃんと』するもんでもないし、できるかどうか気にするもんでもない。したくなったらして、したくなかったらしなくていいことじゃないか」

「うん……」

飯山の晴れぬ顔色は変わらない。当然だ、「一抜け」した同僚に言われても納得はしがたいだろう。

「でもな……結婚ってやっぱりひとりの問題じゃないだろう？ おまえの式の時も、おまえよりおまえのご両親のほうがにこにこ嬉しそうにしてらっしゃったじゃないか」

「ああ、そりゃあなあ」

ジンを少量口に含み、安西は続けてもう少し、飯山を追い詰めることにした。

「親は喜んでくれたぜえ。これでおまえも一人前だって」

「……………」

「失礼な話だけどな。俺はとっくの昔に一人前だっていうの」

つきあいに、はは、と短く笑い声を上げる飯山は無性に可愛かった。今すぐに、偽装結婚だとバラしてやりたい衝動をこらえる。

「なによ？ そんなに結婚意識するって、いい相手でもいんの？」

探りを入れると、飯山の笑顔が苦笑に変わった。

「まさか。いたら、結婚できるかどうか、不安になったりしないだろう」

「そうか？ いるからこそ、悩んでんのかと思ったんだけどな。具体的になるだろ、将来のイメージが」

きわどいところに踏み込む。だが、杉の存在を意識した発言に、飯山のガードは瞬時に堅くなった。だからさあ、と飯山は安西の肩を叩いてくる。

「具体的に将来のイメージができないから悩んでるんだろ。やだねえ、これだから既婚者は」

やっかむように言われたら、今度はこちらが苦笑するしかない。

「おまえなら、その気になればすぐに結婚相手ぐらい見つかるだろ」

と返すのがせいぜいだ。

「うーん……俺はおまえほど器用じゃないからなあ」

確かに。と安西は心の中でうなづく。飯山には杉との交際を秘したまま、女性と偽装結婚するなど、絶対にできないだろう。

「高望みしてんじゃないか？」

「あんな綺麗な女性を射止めといて、おまえがそれを言うか」

笑って照れるフリをしながら、安西は内心、焦る。この流れではこれまでの二年と同じだ。手の内をさらさない飯山に、ごくごく自然な会話を明るく続けられて、「じゃあまた、会社で」となるのが常だからだ。

「――おまえから見たら」

安西は思い切って、勝負をかけることにした。低く言う。

「おまえから見たら、俺は幸福の絶頂のように見えるのか」

飯山の目が丸くなる。

「……意味深な発言だな。新婚一日目の男の言葉にしちゃ」

「今夜、俺の家に来てくれたら……おまえにもわかってもらえらと思う」

謎かけめいた言葉に、場の空気が重くなる。

それからは飯山もあまり口を開かず、ふたりは黙ってグラスを重ねた。

「いや、でもやっぱり、今日はよすよ」

店を出たところで、案の定、飯山はそう言い出した。

「たださえ、おまえ、奥さんとしっくり行ってないなら、俺なんか連れて行ったらまずいよ、絶対」

安西のほのめかしを、まさか偽装結婚とは思わないのだろう、飯山は気遣いを見せる。

「しっくり行ってないわけじゃない。俺とあいつはこれ以上ないパートナーだと、互いに思ってるよ」

「なら……なおのこと、俺なんか……」

「俺とあいつはベストパートナーだから、俺はおまえに俺の家を見てもらいたいんだ」

飯山の表情が複雑そうに揺れる。これまでの長いつきあいで、こんななにかを秘めたような会話になったことはなかったから、余計だろう。

「……まあ、おまえがそこまで言うなら……」

不承不承のうなずきだった。

飯山の気が変わらぬうちにと、急いでタクシーを拾う。

新居のあるマンションに着くと、飯山の足がまた止まった。

「まずい。俺、手ぶらだった。ちょっと今から……」

すぐにも踵を返しそうな飯山の腕を、安西は強くつかんだ。

「いいから！ ……いいから」

「安西……」

「おまえが来てくれるだけで、いいから」

正面から視線を合わせて真摯に言う。強く腕を引いた。

* * *

やけに強引な同僚に押し切られ、新婚一日目の新居まで来てしまった飯山だった。

せめても手土産を用意しなくてはと、近くのコンビニでもいいからなにかあつらえに行くつもりが、またも強引に腕を引かれた。

それでも、どうしても嫌なら嫌と言えた。

いくら安西が強引でも、腕を引かれるままにエレベーターに乗ったのは、「結婚」について安西が見せた、暗い翳りのようなもののせいだった。

男とつきあっている飯山には望むべくもない、みんなに祝福されての結婚式。その式を挙げたばかりの男が見せたいわくありげな態度の意味が、飯山は知りたかった。もしかしたら、結婚なんかしなくてもいいと思える材料が欲しかったのかもしれない。

まだ新しいマンションはエレベーターホールも通路も綺麗で、賃貸だというが内装もなかなか洒落た造りになっていた。

「ここだ」

と安西が鍵を取り出したのは、7階の突き当たりの角部屋だった。

ドアが開かれる。

中は真っ暗だった。

「奥さん、まだ帰ってないのか」

「……上がれよ。ビールでいいか」

さっさと靴を脱ぐ安西の後ろ姿に飯山はドアを押さえたまま声をかけた。

「奥さんいないなら、俺はもう帰るよ。じゃあ……」

「上がれって」

振り返った安西に強い声で言われる。

「でも……」

「なんだ」

安西が、飯山が初めて見るような含み笑いを漏らした。

「男に誘われた女子中学生みたいだぞ？ いいから上がれって」

その口調も微笑も、いつもの安西のようできて、ちがう。なにか粘着質で、なにか仄暗いものに飯山のなかで警戒音が鳴る。だが、女子中学生みたいと言われて、「でも、やっぱり」と帰るわけにもいかなかった。

「誰が女子中学生だ。……じゃあ、ちょっとだけ……お邪魔するよ」

明かりのついた廊下をリビングへと進む。玄関同様、モダンテイストにまとめられたリビングはモデルルームのようだった。

「へえ、さすが、綺麗な……」

言いかけたところだった。

後ろから突然抱きすくめられて、飯山はひっと声を上げた。

なにを仕掛けられたのか、とっさにわからなかった。

後ろから自分の両腕ごと、まるで拘束するようにしっかりと抱き締めているのが安西にまちがいないと悟って、さらに混乱する。

「あ、安西……！ な、なんの冗談だ！ 放せ……！」

腕を一本でも引き抜こうともがきながら、きつい声を出した。が、

「杉でいいのか」

首筋に熱い息とともに吹きかけられた言葉に、瞬間、動きが止まる。

「……え」

「本当に杉が相手でもいいのか。……俺じゃダメか」

想定外の言葉を続けざまに浴びせられ、抵抗を忘れてしまう。

「あ、安西、なにを言って……」

「知ってるぞ。つきあっているんだろう、杉と」

「な、にを、バカな……」

笑って否定しようとした声が見事にうわずった。

「あせらなくていい」

首筋にぬたりと濡れたものが這った。温かく濡れて柔らかなその感触に、唇を這わされているのだらうと知れる。――身の毛がよだった。

「俺もゲイだ。おまえを笑ったりしないよ」

「……え」

もう本当になにがなんだかわからない。この男は昨日、結婚式を挙げたばかりではないのか。

「偽装結婚だよ」

首筋に唇を押し付けたまま、安西がしゃべる。その震えが気持ち悪くて、鳥肌が立つようだった。さらに言われた言葉を理解して、今度は虫唾が走る。

「は？ 偽装？」

「心配ない。彼女には彼女がいるんだ。向こうで一緒に暮らしている」

今度は理解に少し時間がかかった。彼女に彼女……意味が通じができた瞬間に、ことのカラクリがはっきりと見えた。

「おまえ……最低だな！」

「なんで。誰が困るんだ」

飯山がおとなしくなったのをいいことに、手が顎へと回ってきた。後ろを向かされる。

「言ったろ。俺とあいつはベストパートナーだ。お互い、結婚相手が見つかって親への面目も立つ、社会的信用だってできる、お互いの恋愛は今まで通り、ほら、誰も困らない」

間近にある安西の顔を飯山は精一杯の怒りを込めて睨みつけた。

安西が眉をしかめる。

「誰も困らないのに……なんでおまえが怒るんだよ。……まいったな、おまえ、そこまで潔癖だったのか」

「俺もおまえがここまで腐れたヤツだとは知らなかった」

吐き捨てるように言うと、ハンサムな顔が歪んだ。

「腐れ……って、おまえ、ひどいね」

「ひどいのはおまえだろう。何も知らずに喜んでるおまえのご両親や奥さんのご両親に、申し訳ないとは思えないのか」

「じゃあ、正直に『あなたの息子はゲイです、男と抱き合って喜んでます』って伝えるのが親孝

行か」

反撃に飯山は詰まる。そうだ、まさにそれが悩ましくて、昨日から苛立っていたのだ。

「なあ」

飯山の沈黙におもねるように、安西の口元に笑みが浮かんだ。

「割り切っていこうぜ？ どうせ社会的にも少数派、神様の摂理にも背いた俺たちだ、開き直って人生と恋を愉しんだほうが得じゃないか」

「得？」

それは安西らしいセリフと言えた。飯山に本社移動を勧めた時も、杉の香港出向を勧めた時も、安西は「有利」「得」という言葉をやたらと使っていた。

いつもなら、そんな合理的な考え方が頼もしくさえ見える飯山だったが、今はちがった。

「人生をどう愉しむのかが、損得で決まるのか」

冷たく言い放つと安西の力がゆるんだ。その機を逃さず、腕を振り払うように抱擁から逃げる

。

今度は正面から安西と対峙する。

「は」

バカにしたような安西の笑いだった。

「なんでそんな四角四面に考える。……あれか。やっぱり設計者なんかとつきあってると、ものの考え方がうつるのか」

「設計も営業も関係ないだろう！」

たまらず飯山は声を荒げた。すると安西はまいったというように首を振った。

「……なんでこんな流れになるかな」

「おまえがトンデモなことを言い出すからだ！」

「トンデモってなんだよ。杉のことか、偽装結婚のことか。……結婚のことならしょうがないだろう。俺たちは少数派だ。これといって理由もないのに、いつまでも独身でいたら、それこそ親に泣かれる。知ってるか？ 今では親同士の見合いの会まであるんだぜ？ どうするんだよ、いとお嬢さんを見つけてきたわ、なんて言われたら？」

安西の言葉は飯山にとっても痛いところを突いている。

「……でも、それでも……周囲の人をだますようなマネは……」

それでもあえて正論を言いたかった。飯山が「俺はそんなマネはしたくない」と言い切ると、安西もまた、痛みを感じたように眉を寄せた。

「俺だって……ずいぶん悩んだんだ」

おまえ、と顔を上げた安西の表情は、仕事などで安西が時折見せる、真剣なものだった。

「おまえは杉が初めての同性の恋人だろう。つきあって……三年か。ゲイ経験も三年なわけだ」

安西が正確に自分たちの交際を把握していることに驚きながら、飯山はうなずいた。

「たった三年だ。……悩んだのも三年分」

疲れたような笑みが安西の顔に浮かんだ。

「俺は中学に入ってすぐからだ。……初めて好きになった相手が同性だった」

「……………」

「異常だ、気持ち悪い……そう思うのに、自分の心は止められないんだ。女の子と仲良く遊ぶこともできる。だけど……キスができない。手をつなぎたくなならない。……そんな自分をどうしようもなかった」

重い告白。飯山はただ黙っているしかない。

「中学高校、好きになる相手は同性ばかり。興奮する相手もな。……一度、先輩とキスしているところを親に見られた。ふざけただけだって、嘘をついたよ。親はあからさまにほっとしていた」

すでに自立している飯山は杉との触れ合いを親の目に触れるところで行うことはない。まだ思春期の恋を親に隠さねばならなかった安西の経験は、そのつらさを想像するしかなかった。

「もう十五年だ。十五年、俺は悩んできた。俺が欲しいもの、世間が求めるもの、そのギャップに俺はずっと苦しんできた。……それでもおまえは、俺を非難するのか」

まっすぐに合わされる真摯な眼。飯山は覚えず、一步後ろへと下がる。

――もしも杉とのキスを親に見られたら……嘘をついてごまかさずにいられるだろうか？

自分は偽装結婚などしないとは言い切れたが、なにがあっても嘘をつかずに真実が言えるかと聞かれたら、自信がなかった。そんな自分に安西を非難する権利はないように思えてくる。

「飯山。俺は腐れてるんじゃない。ただ……ただ、疲れたんだ」

深い吐息が言葉のあとに続く。

十五年。その長さを思うと飯山はなににも言えなくなった。

「自分はマイノリティだ、限られた、自分と同じ種族の間でしか、正直に生きることは許されない……俺はそう思って生きてきた」

真摯な瞳で、安西は静かに語る。

「入社式で、見るからにタイプの……好みのヤツを見つけても、俺は最初からあきらめるしかなかった。同期の友人として親しくなって、どんどん……どんどん惹かれていっても、人畜無害な、フツーに女が好きな男として振る舞うしかなかった」

飯山はゆっくりと眼を見開いた。――それは……それはもしかして……。

友人としか思っていなかった男の思いがけない告白に、心拍が早くなってくる。

「つきあう相手は同族のヤツらが集まる店で見つけて、本当に好きな相手は眺めてるだけ、そいつが彼女とのデートでいそいそと帰っていくのを見送るだけ……。仕方ないとあきらめてたよ。ゲイなんだから。異端なんだから。友人としてつきあえるだけマシ、自分にそう言い聞かせてたよ」

なのにさ、と安西は苦笑を浮かべた。

「そいつ、男とつきあいだすんだぜ？ それも俺よりあとに知り合ったヤツと。なんで、なんで俺じゃないんだよ、なんで」

安西は睨むように飯山の瞳に視線を当ててくる。そらしたいのに、飯山はできなかった。

「確かにヤツは仕事はできるよ。設計者にしたら、人づき合いもうまいほうだ。……でも、無口だろ？ 理屈っぽいだろ？ こまめで、神経が行き届いた恋人じゃないだろ？ なんで、そんな

ヤツにおまえを取られなきゃいけないんだよ」

これはマズイと、頭ではわかっているのに、軀は安西の視線と言葉に絡め取られたように動かない。

ずっと友だちだとしか思っていなかった相手からの、まさかの告白。笑って「なに冗談言ったんだ」と流すには安西の瞳は真剣過ぎたし、怒って「気持ち悪いことを言うな」と拒絶するにはその言葉が重過ぎた。

長い間、いい友人だった。一緒に酒を呑み、そして仕事をして、互いにどんな人間か、よくわかっている。仕事の段取りの付け方、取り組み方にはその人間の社会性と人間性が出る。安西は多少、要領がよすぎるきらいはあったが、これと思った仕事には正面から取り組む熱心さがあった。安心して友人を紹介できるし、仕事を任せることもできる相手。

その相手から秘めた恋心を告白されて、笑ったり怒ったりできるほど、飯山は冷たい人間ではなかった。

「安西……でも……」

「本当にあいつでいいのか？」

低く、問われる。

「あいつはおまえの全部を、ちゃんと受け止めてくれるのか？ あいつは細かいおまえの心の揺れをちゃんと察してくれるのか？」

答えようとして口を開いて、声が出なかった。もちろんその通りだと答えるべきだが、嘘はつけなかった。

「――あいつの、足りないところだけでいい」

安西の声に、なにか飯山を甘やかそうとでもいうかのような響きがまざりこむ。

「あいつの、足りないところだけ……俺に埋めさせてくれ……」

――これは……。

この口説きに最後まで抵抗できる女はいないだろうなと飯山は思う。なんだ、この……じわじわと周りを溶かし、核の部分にゆっくりと沁みてくるような話の運びは。

口説き上手とはこういうのを言うんだだろうなと、またぼんやりと飯山は思う。

安西の手が肩にかかり、頬へと上がってくる。

払いのけるべきだと頭の隅がうるさかったが、さっきまでの安西の言葉が麻薬のように脳髄に沁みってきていて、軀の自由がきかない。

まるで見当ちがいの言葉なら、きっとこんなふうにはならなかった。だが、安西が杉に関して言った言葉は、すべて正鵠を射ている。

――そうだ……今夜、俺が安西を誘ったのも……。

まさに杉に足りない部分を埋めようとしてのことだった。

ゆっくりと安西の顔が、友の顔が近づいてくる。

飯山は金縛りに遭ったように、ただ、視界いっぱい広がってくるその顔を見つめていた。

やった、と安西は思った。

最初は失敗したかと思ったが、やった、口説き落とせたと。

* * *

ゆっくりと唇が触れ合った。

ふにゃんと柔らかく、頼りがいのない感触に、反射的に軀が引ける。

さらに追うように唇を重ねられて、顎が触れ合った。

ざり、とヒゲ同士が擦れる感触に、背筋に冷たいものが這った。

男同士でキスしているのだと、嫌でも思い知らされて、足元からすうっと冷えるような感覚に襲われる。

杉とはこんなことはないのに……と思う間もなく、ついに、くによくによと唇が唇をまさぐるような動きに、その温度に感触に、喉の奥から急激に酸っぱいものが込み上げてきた。

「……ッ」

飯山は思い切り安西の軀を突き飛ばしていた。

「飯山……」

傷ついたような安西の顔にも、かまっている余裕はなかった。

「ト、トイレ！ は、吐く！」

* * *

トイレから出てきた時の、申し訳なさそうな飯山の顔に、安西はもう溜息をつくしかなかった。

「……すまない、その……今夜は呑み過ぎたみたいだ……」

長いつきあいだ、あの程度の酒で酔うはずがないのは互いに知っている。

「つまり、俺とは同僚としてしかつきあえないってことか」

渋い顔で言うと、飯山は小さく笑った。

「友達としてもつきあえるぞ？」

今夜、自分がしたことを思えば、それでも十分かもしれなかった。

「それはありがたいな」

安西も笑ってみせるしか、なかった。

* * *

しかしトンデモな夜だった。トンデモな、告白だった……。

タクシーで帰ってきて、カバンの中に鍵を探りながらアパートのドアに近づけば、もうお約束

のように、ドアの前に背の高い男の影があった。

「……おまえ……」

脱力しそうになりながらも、思わず口元がゆるむ。

「ごめんなさい」

杉は直角に腰を折る。

「あなたに実家に帰るように言われてましたけど……二晩も別々なんて……」

「……入って待ってればいいのに」

本当にもう、この男は……。

「でも……実家に帰れと言われていたので……」

溜息まじりの苦笑を漏らして、鍵を開ける。従順な男は後ろからついてきた。それでもやはり気になるのか、

「今夜は……遅かったですね」

と、おずおずと聞いてくる。カバンを床に投げ出してカウチに倒れこむように座ると、杉はこれまたお約束のように、その前に正座した。

自分を見上げる瞳を見ていて、ずっと腹が決まった。

「……安西と呑んでた」

正直に告げる。きらりと杉の眼鏡が光った。

「新婚一日目に？」

「偽装結婚だそうさ。ゲイだってカミングアウトされた」

また、今度はきらりと杉の眼鏡が光った。

「それだけですか！」

すでに唸り声を上げている犬のように背中毛を逆立てている男を、飯山は自分の隣へと手招いた。

なにがあるのかと警戒している男の手を握る。

「――好きだったって、言われたよ」

握っていた男の手が、痛いほどに力を増す。その手を唇に持って行って、飯山は自らのものより太い指の関節にキスを落とした。

「やっぱり……やっぱりあいつは……！」

珍しく興奮して声を荒げる杉の指を、口に含む。性器を愛撫するときのように、舌を使い、唇でしごいた。――これが股間のものであっても、この男のモノになら同じことができると再確認しながら。

「飯山、さん？」

ひとしきりしゃぶってから、口から放す。自然と笑みが漏れた。

「安西にコクられて、改めてわかったよ。……俺は、本当におまえじゃなきゃダメだって」

「……なにか、されたんですか」

「抱き締められて鳥肌が立って、キスされて吐いた」

杉が立て続けにまばたきする。怒りたいのか、笑いたいのか、わからないいらしかった。

「前から言ってたけどさ……俺、本当に、男はおまえ以外、受け付けない。おまえしか、ダメなんだ。きつともう……女もダメだと思う」

「……………」

「おまえが言ったとおりだよ。『無理』なんだ。俺はおまえとつきあってる。おまえとしかつきあいたくないんだから」

きのうは腹が立って仕方がなかった。身を固めるのは無理だと杉に言い切られて。でも、今なら「その通りだ」とうなずくことができる。俺はおまえとつきあってる、だから無理なんだと。「きのうは……悪かったな。おまえは当たり前のことを言うてくれただけなのに、俺、怒っちゃって」

「そんな……」

「なあ、杉」

「はい」

眼鏡の奥の黒い瞳を見つめる。要領が悪くて、不器用で、理屈責めで押すことはできても、甘い口説きなどとてもできそうにない男。女と結婚するのは自分たちには無理だと言い切り、それでも飯山が結婚に執着すると、ならば式を挙げようと言い出す男。

自分にどこまでも寄り添ってくれる、この男が愛おしい。

「結婚しよう」

「……………」

「結婚しよう。俺たち。祝福してくれる人だけでいい。祝福してもらって、結婚しよう」

「……はい……」

最初は息の音だけだった。

「はい」

今度は少し声が出た。

「はい！」

三度目は大きく響く声だった。

「和弘！」

強い力で抱き締められた。

「幸せに、幸せにします！」

もうしてもらってるよとささやけば、情熱的にキスされた。その唇も、顎のヒゲも、もちろん舌も唾液も、なにもかもがうれしくて、飯山は自分からも舌を絡める。

バカなことを言ってしまった。けれど、悔いはない。安西が苦しんだ十五年の長さを理解していないわけでもない。

——ああ、そうだ。

こいつは機械バカだけど。

少し堅い髪に指を這わせながら、飯山は納得する。

俺も立派にバカだなあ、と。

end

2011.8.14 同人誌発行

br /

文系彼氏の口説き方

<http://p.booklog.jp/book/113017>

著者：楠田雅紀

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kusuda-masaki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113017>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト